

バンドリ！自分の幼馴染
はヤンデレ？それとも
普通？

翔斬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貴方はヤンデレ？それとも普通？皆さんはどちらが好きなのか？そんな状態にされ
た1人の青年高田祥平。果たしてどんな事になるのか？

目

次

第1話	普通が良いな①									
第2話	普通が良いな②									
第3話	普通が良いな③									
第4話	普通が良いな④									
第5話	普通が良いな⑤									
第6話	普通が良いな⑥									
第7話	仮面ライダークイズ勝負！									
ラボ編①										
ラボ編②										
第9話	仮面ライダーキュイズ勝負！									
ラボ編③										

84 コ 77 コ 72 コ 66 53 32 17 7 1

第10話	普通が良いな⑦									
第11話	普通が良いな⑧									
第12話	普通が良いな⑨									
第13話	普通が良いな⑩									
第14話	普通が良いな⑪									
第15話	普通が良いな⑫									

127 122 116 108 100 93

第1話 普通が良いな①

祥平「はあ…はあ…はあ……もう！」

いつもは挨拶するんだが今日はすまない皆！俺はある幼馴染から逃げてる……いつもだつたら普通何だけど今日は最悪だ。

???「何処にいるのかしらね？大人しく出てくればスタンガンは止めて上げるから出できなさい。」

スタンガン持ちながら言う台詞じやねえよ！怖い！怖い！……んで何でこうなつてるかは簡単に言うと自分以外の女性と話すの駄目、ラ○ン駄目、触れるのも駄目。まだあるんだけど取り敢えずはこの位で勘弁して！

???「みい～つけた～♪」

ん？後ろ？んな訳…………凄い殺気を感じる…………

祥平「あぶな！千聖さん！それ止めて！まじで死ぬから！」

俺はスタンガンをギリギリ避けて話すがまじでギリギリチャンバラつて所だな！はい！アルトじや～ないと！

祥平「うお！」

スタンガン何とかしないとあそこにまた閉じ込められる。絶対嫌だかんな！

千聖「祥平のギヤグはまた今度ね？」

あれえ、俺のギヤグは心の中で言つたつもりなんだけど心の中

千聖「読めますよ？祥平の全部を私は知つてますからね♪昔から。」

ハイライトないから余計に怖い！

祥平「うそお、うおい！不意打ち止めなさい！」

めつちや言い方怖い！取り敢えずここは！

祥平「チャーオ！」

俺は全速前進だ！を使い何とか振り切つた……そう思いたい……千聖がどうして俺の幼馴染が何でヤンデレになつてるの……あの時はまだ優しかったのに何で急にヤンデレになつてるのかを誰か教えてくれない？ん？誰だよ折角逃げれたのに肩をポンポンする？

祥平「しつこいな……」

千聖「行きましょうか♪」

俺は首根っこ掴まれてしまう……

祥平「嫌だー！死にたくない！……死にたくない！」

俺はこの後スタンガンで気絶をしてそこから何も覚えてない……

♪??♪

……!、ここは何処だ？それにどのぐらい寝て……あれれえ～おつかしいぞ～？

祥平「両手が手錠で両足が縄で縛られてるのかよ！」

俺は無理に動くがやつぱり外れないよなあ……てか

祥平「千聖さんやこれを外してください 「いやよ」なんでや！」

千聖「どうせ逃げるでしょ？」

うぐ！見破られてる流石は幼馴染！でもよ……

祥平「これは良くないと思うんだけど止めてくれはしないですか？」

千聖「止めません。他の女と話したり近付くのも許さないわよ。」

それはどうしようもないんだが？

祥平「じゃあ～俺にどうしろと？」

千聖「誓いなさい！」

祥平「誓う？何を？」

千聖「私以外の女に「いやそれ以外でよろ」手強い……でもそれでこそよ」

……まじで皆の前では優しい白鷺千聖何だが俺にはここまで束縛するの？

千聖「愛してるからよ？」

祥平「しつと心を読むのを止めてくれませんか？」

まじで愛だけでそんなの可能なの？誰か教えてくれない？

千聖「なら最後の手段よ。大丈夫、痛くない用にするから安心しなさい♪」

おい！待て！その手の動きは何か駄目な奴だよ…この小説R18じゃないし！作者もこれ以上の事は無理だから！

祥平「服を脱ごうとするな！まじでアウトだから！ストップ！ストップ！ユア！エンジン！」

千聖「大丈夫……これが終わったら解放するわね♪」

これ以上はアウトなので割愛！

祥平「…………もうやだ……」

俺は手錠と縄をほどいて貰つたが一言ある

祥平「普通が1番だわ……」

とまあ、こんな俺の日常が大変になつたのは千聖がヤンデレっぽいのに変化してしまつてから俺の日常はいつも大変になつてる。え？どうしてこうなつたかを知りたい？…………あんまり思い出したくないがあれは1週間前の事になるかな？

（1週間前）

祥平「今日は仮面ライダージオウの映画の日！」

改めて俺は高田祥平です。え？知ってる？仮面ライダーエグゼイドになつてた？そ

れは気のせいでしょう？俺が仮面ライダーになつてる訳ないですよ？（この世界の彼は人並みには訓練してるが仮面ライダーにはなれません）

祥平「早くしないとな」

???「あのぉすみません」

え？女性に声をかけられたが……え？サングラスに帽子？……

祥平「どちら様？」

???「私よ！仮面ライダー好きのしよう君」

ん？そのあだ名を知つてるのはただ一人！

祥平「ち「待つて！」むぐ！」

???「こつちに来て！」

俺は領いて人があまり通つてない場所に移動した。

???「ここなら大丈夫ね」

そう言いながら帽子とサングラス外したがやつぱりだつた。

祥平「小学生以来だな千聖」

千聖「本当に随分久し振りね」

祥平「まさか会えるとは思つてなかつたわ、ははは」

千聖「そうね、それで何をしてたのあそこで？」

完全に忘れてた……ジオウの映画時間完全に忘れてた！

祥平「実は今日が仮面ライダージオウって映画を見に来たんだけど次の時間まで待つしかなさそうだな、千聖は何してたの？」

千聖「私は友達と買い物終わつたからその帰りだつたの。まさかあんな所でしよう君に会えるとは思わなかつたわ♪」

千聖は相変わらず笑顔が似合うな……

千聖「どうしたの？」

祥平「何でもないや、んじや俺は暇潰ししてから映画見るとするかな、千聖にも会えだし最高の気分だな」

千聖「は？え？最高の気分つて……何言つてるの！もう！」

祥平「悪い悪い、じや俺は行くから気を付けてな」

行つちやつた……でもまた会えるわよね？

END

第2話 普通が良いな②

その後俺は2つ目の時間でジオウの映画が始まるまで時間を潰していた。

祥平「んー、何すつかなあ」

俺は次の時間でのチケットを買つたのを財布にしまう。

祥平「最近女の子のバンドが多いな……まあ、俺には関係ないし良いか」

この時の俺は知らなかつたまさか千聖にあんな目にあわされる何て思いもしなかつた。

祥平「およ？電話だ……ん？見た事ない電話番号……」

普通なら絶対出ない方が良いんだよな、とりま切ろう……

祥平「よし一先ず……またかよ」

俺は再び電話を切る。

祥平「…………」

もう……電源オフだ、もう大人しく待とう。

祥平「時間までは音楽でも聞いて待とう」

俺は映画の時間まで座つて音楽を聞いている。あくやつぱりニブンノイチは最高や

なあ……あ！ そうだ！ スタービルドストライクガンダムのプラモあるかな？

「プラモ屋」

祥平「あぶねえ、残り2つ何とか買えた買えた。んじゃ映画館の所に戻るか。」
プラモ屋から出たのは良いんだがもつとも見たくなかつた物を見てしまつた。

不良「姉ちゃん暇何だろ？ 俺達と楽しい事しようぜ？」

??? 「私はこれでも忙しいの、申し訳ないけど」

不良1 「兄貴の誘いを断るのか？」

うわあ、ナンパつてあるのかよ……仕方ないですかね

女性を連れて行こうとするの？」
祥平「はいストップ！ これ以上は止めない？ あんた恥ずかしくないの？ 無理矢理この

不良「おめえには関係ないだろ？」

祥平「まあ……確かに……でもこんなのはつとく方がもつと恥ずかしいだろうね！」

俺は不良の股間を蹴る！

不良「ごふ！」

不良1 「あ！ 兄貴！」

祥平「今のうちに！」

俺は女性の手を掴んでその場から走つて逃げる！

??? 「ちよつと！」

不良達からは何とか離れた場所に逃げられた。

「店の玄関」

祥平 「店の玄関まで来ちゃつたが俺は戻るから氣を付けて帰つてな！じやあな！」

俺は映画館の場所に戻つて行く。

??? 「男なんて下らないと思つたけどあの⼈…………面白い人だつたわね。でもあの男だけは許しちゃいけない……私を…………見捨てた男だけは！」

「映画館」

俺は映画を見終えた！いやあまさかあんな風にバー○○スが倒されるとは笑つちまうや、それに懐かしいのとびっくりだつたライダー現れたもんな。

祥平 「そして次のあの仮面ライダーだよなあ、くうー！楽しみだぜ！」

俺の1日は終わつた。てか電源オンにしたが…………怖いぞ普通に！誰だよたく…………だがまだ普通の日常の1日目が終了。

「次の日の朝」

祥平 「zzz」

こいつまだ寝てるのね…………ハリセン持つてそして

??? 「いい加減に起きなさいー！」

祥平「いてええええ！」

大きなハリセンが祥平の頭を叩くがこれが凄く痛かった。

祥平「姉さん！痛い！」

??? 「おはよう！」

祥平「おはよう！じゃないだろ！そんなドデカイハリセンいらぬだろ！」

??? 「いるよ！」

祥平「何に！」

??? 「あんたがちゃんと目を覚ます用に！」

祥平「いや！それ！洒落にならないからな！痛いから！」

こうして俺の朝が始まる。デカイハリセン何てあんなのドMくらいだろ喜ぶのつて

?

??? 「あんたが喜ぶでしょ？」

しつと心読むの止めてくれないか？まじで何で分かるの？

??? 「え？→に書い「メタル！」 むう！」

えーと、この人は高田利奈。え？見た事ある？それは仮面絶唱シンフォギアを読んで

くれたまえ！え？メタイ？姉さんが言つた事の方がメタイからね？

利奈「ほら！明日から学校何だからちゃんとしどきなさいよ？」

あーそう言えばそうだつた……え?しかも何処のだよ

利奈「場所ならパンフレットをお母さんから貰つたから」

へえ?母さんがか……そこに書いてあつたのは花咲川女子学園……

祥平「ぶふう――!おい!女子の学園だろ!何でなの!」

利奈「お母さんがそこの理事長と友達で今度共同にする事を考えてたらその乗りであ
んたがそこでお試しで入る事になつた、まあ頑張つて……」

あの母親め!今は姉さんと生活だが今度帰つて来たら覚悟しとけよおぐぐ!

利奈「あ、今日あんた暇でしょ?」

祥平「は?暇じや「暇でしょ?」はい暇です」

くつそお:何でこうなるんだよ!

ヽ昨日の店の中ヽ

祥平「んで何を買いに来たんだよ?」

利奈「え?スタービルドストライクガンダムのプラモに決まつてるでしょ?」

昨日の俺やん!てか今日はそれで組み立てようとしたんだが

利奈「どうせ昨日で買つたんでしょ?しかも2個も?」

ばれてる……だとおおおお!

祥平「なら早く買うんだろ?」

利奈「帰つたらさつさと一緒に組み立てるからね！」

パーティ混ぜたらまじで駄目な奴だから皆はガンプラやプラモ組む時に友達との混ざらない用に自分で管理ね！これお兄さんとの約束な！え？おじさんだつて？ちょっと何を言つてるのかな？」

「プラモ屋」

利奈「良し！早速！」

まあでもスタービルドストライクガンダムって昨日でぎりぎり買ったからもうないだろうなあ、あれ凄い人気だしな、え？何故2個買つたのか？姉さんが買えないの何となく分かつてたんだよね、だから姉さんの分は買つてあるから安心なんだよね。

利奈「祥く平く無かつたようく」

涙目で抱き付く姉さんの頭を撫でる。

祥平「うん、昨日買つといたから帰つたら組もうよ、ね？」

利奈「うん：ぐすん」

そうして別の店で買い物してから俺と姉さんは家に帰るんだが……

千聖「しつこいですよ！」

不良「別に姉ちゃん暇何だ……ごつはああああ！」

蹴りを入れて不良を吹つ飛ばすんだが……

祥平「あ、やべ、力入れすぎた……あいつら昨日も痴漢してた奴だよな？大丈夫か？」
取り敢えず一旦行こう

俺と姉さんそして千聖は店から出て公園に移動する。
「公園」

祥平「ほい、水だよ」

俺はペットボトルの水を千聖に手渡す。

千聖「ありがとう、また会えるとは思わなかつたわ。いたつ！」

祥平「無事なら良かつたが……足！怪我してるじyan！俺のせいだ！ちょっと待つて
てくれ！姉さん！……あれ？いないし！」

やつぱりしよう君の優しさはあのままね。

千聖「……ふふ、変わつてないわね」

祥平「え？」

千聖「だつて私の怪我を見て慌てるのつて昔にもあつたでしょ？」

……あー、そんな事あつたな、あん時も慌ててたのは確かだから良いんだけどな

祥平「てか千聖は何か用事だつた？」

千聖「実は友達が来るのを待つてたら」

祥平「案の定にナンパされてたもんな……待つてそしたらここにいるの不味くない？」

その友達の待ち合わせ場所に戻るぞ！」

え？ 何でしゃがむのかしら？

祥平「乗れ！」

千聖「え！」

祥平「乗るんだ！ 千聖！」

千聖「聞こえるけどもう1回言わなくて良いから！」

でもしよう君は自分のせいで追い込む事あるから仕方ないかしらね。

千聖「それならお願ひするわ。」

そのままおんぶするけどやっぱり凄く恥ずかしいわ。

祥平「行くぜ！ 行くぜ！ 行くぜ！ 行くぜ――！」

千聖「わあ！」

俺はあるライダーの台詞を言いながら走つて行く！

祥平「走れば間に合うよな！」

千聖「でも気を付けて下さいよ！」

しそう君はやっぱり面白い人だけど……やっぱり何処か無理をしてる？

先ほどの店の中へ

祥平「一先ず足の怪我の方が先だな」

一先ず薬局の場所に向かう。

（薬局）

店員「ありがとうございました！お大事に！」

（薬局の外）

包帯と塗り薬を買って出て来たしよう君。

祥平「それじやあ、手当てるよ」

俺は千聖が足の怪我した所を手当てをする。

祥平「そう言えば学校とかは大丈夫なのか？」

千聖「学校は言つてたけど私これでも女優とバンドをしてるのよ」

へえ～女優とバンドねえ……んうーーー！」

祥平「え！女優とバンド！」

千聖「いたつ！」

祥平「あ…ごめん！」

俺はびっくりしてしまい力加減を間違えて強く包帯を閉めてしまつた。

千聖「もう！痛いわよ！」

千聖はぽかぽか俺の頭を叩く。10コンボだドン！

祥平「ごめん！だから叩くの止めて！」

それでようやく包帯は巻き終えた。

千聖「……」

祥平「そんな頬を膨らませないで下さいよ」

先程間違えて強く包帯をやつちやつたから千聖はめつちや怒つてるよね?

祥平「本当にごめんなさい!だから怒るのは勘弁して!」

千聖「ふつ：あははは！そんなに泣きながら必死なのも本当に久し振りね……分かつたわよ、それなら今日私の友達との買い物に付き合ってくれれば、許して上げるわ

よ」

こうして俺はそのまま千聖の友達と買い物に付き合ってくれれば許して貰える事を言つてくれた。これ大丈夫だよね？

END

第3話 普通が良いな③

俺と千聖は友達の所に向かっているんだが……何か大丈夫なのか?歩きにくそうな
んだが?

祥平「……なあ、何かさつきから辛そうだけど大丈夫?」

千聖「大丈夫よ、この位なら、いたつ……」

はあー、千聖はこう言うと思つたよ。そんなの納得行かないな

祥平「ほら肩に掴まれ」

千聖「でも「いいから」……ありがとね」

しよう君、いつの間にかこんな風に変わるなんて……誰かと付き合つてゐのかしら?

祥平「ん? どうした?」

千聖「いいえ、何でもないわ。」

俺達はこのまま千聖に肩を貸しながら歩いてゐるけど友達って何処だ? 千聖がここ
ら辺だつて言うのだが……

千聖「いたわ……」

??? 「あ! 千聖ちゃんつて大丈夫!」

一先ず椅子に座らせてさつきの事を話してくれたけど……

祥平「えーと……何か」

??? 「千聖ちゃんを助けてくれてありがとうございます！」

頭を下げてお礼を言つてくれたのは良いんだが……

祥平「でも俺も怪我をさせてしまつたのはこちらのせいだ……千聖を怪我させて本当にすみませ……あだ！何すんだよ！」

俺も頭を下げて謝ろうとしたけど千聖にげんこつされた！めつさ痛いからね！

千聖「何回も謝らなくて良いから！今日はお願ひよ！」

千聖が勢いよく立ち上がつたのは良いんだがバランスを崩していた！

祥平「あ！いきなり立ち上がるな！」

千聖「え？きやつ！」

怪我した右足に力が入らずに倒れかけた。

彩「千聖ちゃん！」

俺が素早く両手で千聖を抱き込み2人同時に倒れるが俺は下になるんだが

祥平「いってえ！くつそお……千聖大丈夫か？」

千聖「私は大丈夫だけどしよう君の方が大丈夫なの！」

あー、思い切り頭をぶつけてたから痛いだけだから平氣と言えば平氣なんだが……

彩「わわわ／＼／＼

彩は両手を隠しながら真っ赤にしていたがその理由は千聖が祥平の上に乗っていた為であつた。

祥平「えーと、千聖？ 降りてくれないですか？ 人がめっちゃ見てるからさ……」

千聖「へ？……ごー！ごめんなさい！／＼／＼

千聖は素早く降りて反対方向を向いてしまう。

祥平「……えーと大丈夫だよな？」

千聖「大丈夫……／＼／＼

流石に怪我もあるし流石に家に帰らせた方が良さそうだな。

祥平「えーと彩さんだつけ？」

彩「え？ はい！」

祥平「千聖を家に送るからさ、軽く怪我してもやつぱり無理させる訳にも行かない
んだけど良いですかな？」

彩「大丈夫です！ 私もこの後そうするつもりだったので！」

祥平「それだつたら塗り薬と包帯だけは渡しとくよ、俺はそのまま帰るけど……千聖
どうした？」

千聖が俺の服の袖を指で掴んでいた。

千聖「だつたらせめて送つていくのをお願いしたいんだけど……駄目かしら？」
上目遣いと顔を赤くしながらのコンボは卑怯だぞ……怪我させたのもあるし流石に
女の子だけつてのも危ないか。

祥平「分かったよ、家まで送つていくよ」

俺は2人を送つていく事にしたが彩さんはどうすんだ？

彩「私は大丈夫ですから千聖ちゃんをよろしくお願ひします！ 千聖ちゃんちよつと良
いかな？」

千聖「何かしら彩ちゃん？」

彩ちゃんは私の耳元でこう言つて來た。

彩「その人の事好きなの？」

千聖「！／＼あ！ 彩ちゃん！／＼／

なななな！ 何を言つてるのこの子は！

彩「千聖ちゃんをよろしくお願ひしますね！」

……千聖の顔が赤いが……何があつた？

祥平「よし千聖……あれ？ おーい？ 千聖さーん？ ……

固まつてが大丈夫なのか！

祥平「おい！ 千聖！」

千聖「は……えっと、お願ひね?」

何か千聖は大丈夫なのか?これ?

「店の外」

祥平「ゆっくり帰るが痛かつたら言えよ?休むから」

千聖「うん、助かるわ……」

どうしよう彩ちゃんが頑張つて言うから余計に意識して恥ずかしすぎるわよ……で

も……

祥平「ん? どうした?」

千聖「え! な! 何でもないわよ!」

えーそんなに怒らなくとも……

千聖「しよう君に変な質問するけど大丈夫?」

祥平「また、どんな質問する気なの?」

千聖「流石にしよう君がいやだと思ってる質問はしないわよ。」

それなら大丈夫だが……

千聖「それでしよう君つてさ……誰かと付き合つてる人いるの?」

祥平「ぶふうーー! い! いきなり何言つてる! // /そ! そんなの……今はいな

い。」

千聖「それなら好きな人は?」

祥平「いや……いないが……作る気はない」

作る気はない?……聞いて見ないと変わりないわよね。

千聖「どうしてなの?」

祥平「ごめん、それには答えたくない。」

しよう君はやつぱり昔にあつたわよね……今は止めときましよう……

千聖「ごめんなさい……」

祥平「千聖は悪くないよ。ん?またあの不良さんか?」

横の道から一昨日と昨日も見た不良が現れた。

不良「今度は容赦ないぞ!ボス!お願ひします!」

何か凄い怒ってるな……千聖もいるから離れると逆に危ないな……えええええ!…デ

カイんだけど!

千聖「しよう君大丈夫なの?」

祥平「流石に無理だとしか言えない」

それって大丈夫じゃないじゃない!

ボス「俺は赤城二郎や、もしかしてこの馬鹿が何かしましたか?」

祥平「え?……」

あれ？何かここでやられるのかと思つたんだけど……あれ？

千聖「その不良さんが私をナンパしてきました。」

千聖はバツサリ言うんだな

二郎「こんのおー！馬鹿野郎おおおおお！」

不良「ごおはあーーーー！」

うわあ、あのパンチは痛そう……

二郎「うちのもんが本当に迷惑をかけてしまい、すみません！2度とやらないように厳重に言つときますから……ほら！お前ら！」

不良達『すみませんでしたーーー！』

めつちや綺麗な土下座をしてるのを初めて見たよ。まあ、こんな風になるなら助かるな。

二郎「それではお気をつけて帰つて下さいね」

不良達はそのまま二郎さんに連れてかれるが多分……ナンパもうしないよな？

祥平「んじや行こうか」

千聖「そうしましよう……」

そして千聖の家に着いたのは良かつたけど……

千聖家の門前

- 祥平「家でつかいな……」
千聖「今日は色々ごめんなさい。しよう君に迷惑「いいや」え?」
祥平「迷惑なんて思つてない。それに俺も昔は千聖に迷惑かけてたんだ、お互い様だ
よ。」
千聖「でも……やつぱり!」
迷惑だと思つてないんだけどな……!、そうだ!
祥平「どうしてもと言つうなら!」
千聖「言うなら?」
祥平「今日一緒にガンプラ作るぞ!」
……え? ガン…プラ?
千聖「ガンプラって何なの?」
祥平「ん? 確か、ガンダムのプラモデルの略してガンプラって俺はそう呼んでるんだ
けど、実は俺もガンプラは最近作り始めたばつかなんだよね。」
千聖「それって面白いの?」
祥平「人によるかな?俺もアニメ見てからガンプラ触れ始めたんだよね!」
しよう君の笑顔はやつぱり元気が貰えるわ、ガンプラ……ちょっとやつて見ようかな

千聖「しよう君それならしよう君の家にガンプラって何個あるの？」

祥平「ある奴は確か……昨日買ったスタービルドストライクガンダムとビルドガンダムMARKⅡとビルドストライクガンダム……それしかないかな？」

千聖「名前だけ聞いても何がなんだか分からぬ。何か色んなのがあるの？」

祥平「んー、後は昔にやつてたSDガンダムのプラモデルとかが売つてれば良いんだけどな……あ！ 確か中学生の時に同年代の女子から貰つたSDガンダムのプラモある筈！ 今から持つて来るから！」

千聖「ちよつと！……行つちゃつたわね」

しよう君、貰つた物を放置つて何してゐるのよ……でも楽しそうね、それより家の中に戻つて待ちましょう。

???「千聖ちゃん何してるの？」

千聖「あれ？ 日菜ちゃん、どうしたの？ 今日はお姉さんと用事じやなかつたの？」

日菜「それなんだけど聞いてよお！ お姉ちゃんがあの男がもし見かけたら教えなさい！ つて言われた。」

千聖「そうなの？ それでその人の名前とかは聞いてないの？」

日菜「聞いたよ！ でも千聖ちゃん知らないと思うけど一応聞いてくねえ♪」
一応なのね……

日菜「えっとね、確か高田祥平って言う人なんだけど知らないよねえ？」
え？それってしよう君の名前？どうして日菜ちゃんのお姉さんがしよう君を知つて
るの？……一先ずは知らない振りをしましよう。

千聖「ごめんなさい日菜ちゃん、私は聞いた事ない名前ね」

日菜「…………うん！分かつた！ありがとね！」

日菜ちゃんはそのまま何処かにしよう君を探すけど……何でしよう君を？

祥平「千聖どうした？」

千聖「ひやああああ！」

俺が軽く肩をトントンしたらめっちゃ叫んだよ。

祥平「何か、ごめん、そんなに驚くとは思わなかつた。」

千聖「いきなりは止めて、本当にびっくりしたから。……」

日菜ちゃんの事は言つた方が良いのかしら、でもさつきの事もあつたし……

祥平「さつき話してた子つて紗夜の妹だよな？」

千聖「そうだけどもしかして知つてるの？」

祥平「昔にちよつとな、それよりSDガンダムのプラモだ。」

袋に入つてゐのを私は渡されそれを見た……

千聖「キャプテンガンダム？」

祥平「それはそこまで難しくない筈だ。昔にアニメでやつてた物でそれ以降のか分
からないけどSDガンダムのプラモデルは出てるんだよな。」

俺も実際知らないからガンプラ知つてる人にはすみません、俺はまだにわかなので許
して下さい。

千聖「そしたらあがつて」

祥平「え？」

千聖「え？ ジやないわよ、ほら！」

俺は千聖に引っ張られてお邪魔する事になつた。

千聖の部屋へ

千聖「そんなに緊張しなくとも大丈夫でしょ？ 昔はよく此処で遊んでたんだから」

いや確かに小学生の時には確かに遊んだよ、でも千聖は途中から遊ばなくなつたけど
女優をやつてるの知つて今は納得してる。え？ 緊張してないか？ 緊張してるに決まつ
てるからな？」

祥平「緊張するなつて言うけど無理だよ？ しかも昔つてその時は小学生だつたから良
いんだけど久し振りだから緊張はするよ、それに今は高校生なんだからよ」

千聖「しょう君は私に何かしようとしても出来ないでしょ？」

祥平「ごもつともだわ、んじや作り始めるとするか」

そして千聖は説明書を取り出してそれを見てからパーツの確認をしていた。SDガンダムつて懐かしいな。

祥平「一応ニッパーでも使うか？」

千聖「ニッパー？これを使うの？」

からニッパーはなるべく使つた方が良いと思う。」

祥平「そうなのね、それなら全部「待つて！」え？何？」

千聖「そうなの？」

祥平「俺も最初のガンプラ作る時にそうしたら番号分からなくなつたけどパーツの形を見ながら何とか作れた。」

あの時はまじで地獄だつたわ、4時間もかかつたからな、HGガンプラのビルドストライクガンダムフルパッケージ。まじで疲れたわあれは……

祥平「あ！最後に眼鏡ある？」

千聖「確かあるけどどうしたの？」

祥平「パーツ切つてる時に破片飛ぶのがあるかも知れないからかけて作つた方が良

い。」

千聖「目に入つたら大変だものね、ありがとね。」

それからようやくガンプラ組み立てが始まつたが俺はそれを眺めていたがやつぱり気になつたのは日菜ちゃんだ。紗夜の妹さんが何で俺を探してゐる？それに今更会つてもどうにも出来ない、俺がした事は許される事じやない…………

千聖「やつぱり紗夜さんの事気にしてる？」

祥平「え？ 何でわかる？」

千聖「さつきから難しそうな顔をしたり悲しい顔をしてるわよ？」
う…バレてる…

千聖「でもしよう君には笑つてて欲しいの、そんな悲しい顔じやなくて」

千聖は俺の前に近づいて來たがいきなり頭を優しく撫でて來た！はーえ！

祥平「い！ いや！ ち！ 千聖さん！」

千聖「どうしたの？」

祥平「何で撫でる！ 結構恥ずかしいから！」

千聖「それなら尚更止めない♪」

待つてまじで恥ずかしい／＼そんなんに撫でられるとあかんよ／＼

千聖「照れてるの？」

祥平「て！ 照れてねえよ！ ／＼／＼

顔を赤くして言つてゐるけど案外可愛い反応ね、これなら暫く楽しめそうね♪

祥平「これ楽しんでるだろ！」

千聖「え？ 楽しいわよ？」

……あかん、これ以上はまじでやばいから！

（数時間後）

祥平「はあ…はあ…はあ…どんだけ撫でるんだよ」

千聖「しよう君の反応が面白いんだもの、それに照れてる所が可愛かつたわよ」

祥平「可愛かつたって言われても嬉しくないよ……もうこんな時間か、そろそろ帰る
とするかな、明日から新しい学校だし」

千聖「え？ 新しい学校？ 何処なの？」

祥平「花咲川女子学園……」

千聖「え！ そうなの！」

祥平「え、まさか千聖、その反応はまさか？」

千聖「そこに私通つてるわよ！ 何で男子が転校生として来るの！」

祥平「家の母さんがその理事長と友達だからで男子生徒を試しにと言う事で俺が行
く事になつたんだよ」

まあそれから色々話をしてSDガンダムのプラモデルを完成させた千聖であつた。

祥平「もう夕方か、そろそろ帰らないとな」

千聖「今日は色々ありがとね、しよう君も明日から学校頑張りなさい」

祥平「千聖は女優とかでいそが「この怪我なればね」それはすまん」

千聖「冗談よ♪それじやあね！」

祥平「おう！」

俺は千聖の家を出て帰る事にした。だが明日が大変そうなんだよな……

祥平「紗夜……まだあの時の事を怒つてるよな……」

日菜ちゃんで探させたって事は絶対に復讐するんだろうな……俺が悪いからそうなつても仕方ないか。

END

第4話 普通が良いな④

「高田家」

祥平「おはよー」

利奈「おはようって眠そうだけど大丈夫なの?」

祥平「ちよつとスター・ビルドストライクガンダムを最後まで作り上げてたら夜中の1

2時までかかった」

利奈「何でそんな事してんの!」

デカイハリセンで俺は叩かれてしまう。

祥平「いってえ! 何すんの! それ毎回やるけどまじで意識飛びそうだから止めて!」

利奈「それならそんな事してんじやないわよ!」

俺の朝はいつもこんな感じである。やべ! 急いで出ないと遅刻する!

祥平「行つてきまーす!」

利奈「ちよつと! ご飯は!」

祥平「悪い姉さん! 時間ないから!」

俺は走つて花咲川女子学園に向かつて行く!

（花咲川女子学園校門）

はあ……はあ……間に合つた！…………やばい目立つてんな、流石は女子の学園だな

日菜「あれ？君は誰かな！」

げつ！日菜ちゃん！どうしよう…………紗夜がいたら不味すぎるだろ！

???「日菜なにをしているの？あら？貴方はナンパから助けてくれた人じやないですか？ここに何しに来たのですか？」

紗夜がいたよ！やばい…………絶対に俺だと気付かせてはいけない！

祥平「えーと、今日はここに転校してきたんですよ！ははは！」

流石にあかん……紗夜は多分まだ怒つてる筈だもんな……

紗夜「転校？もしかして男子生徒を試しに入れるとは噂してましたが貴方だったんですね。」

あれ？まさか気付いてない？……ならこの場から離れよう！……ん？肩をポンポン？

日菜「そう言えば名前聞いてないよ？私は冰川日菜！」

ウエ？……待て待て待て！そんな事したらやべえんだよ！

紗夜「そうよね、私は冰川紗夜。日菜とは姉妹で私が姉で」

日菜「私は妹だよ！」

うん、知ってるよ！俺も答えなきや絶対に終わる！

利奈「祥平ー！忘れ物してたから持つて来たよー！」

紗夜「祥……平?……」

うわあ～このタイミングかよ姉さん……

利奈 「あれ？ 日菜ちゃんって事は…………これやつちやつたよね？」

祥平「はあ……いいよ姉さん、どこにしろいつかこうなると思つてだから、さてと……紗夜は俺の方を睨んで見てくる。それはそうだよ、昔に俺は紗夜に酷い事したんだ、あれで許すなんて絶対にない……でも……」

やつぱり完全に邪険扱いか？

「その口で私の名前を呼ばないで下さい……」

やつぱりこうなるよな、
でも謝らなきや何も変わらねえ……

氷川姉妹 Sides

田菜 お姉ちゃんこれで良いの?』

絶夜——いいの……それより早く戻らないと遅刻よ?」

彼かした事それだけは許せない 絶対に！

日菜「うん分かってる！お姉ちゃんも頑張つて！」

私は自分の高校の方面の戻りながら考えちゃうね。昔はお兄ちゃんとは仲が良かつたのは知ってるけど途中から遊ばなくなつて笑わなくなつたけど今はバンドで楽しくしてるけど……でも何処か悲しそうに見える。

「冰川姉妹 side end」

「高田姉弟 side」

利奈「祥平大丈夫?」

祥平「何とか大丈夫だよ、んじや理事長室に行つて来るよ。それと弁当ありがとう姉さん……」

やつぱり祥平と紗夜ちゃんに言つた事をまだ引きずつてるか……紗夜ちゃん自信は祥平を許す気なんてなさそう。これは本人達が解決出来れば良いけど祥平はこの事に關しては弱音を吐かないから心に傷が増えてまたあんな状態だけは勘弁してよ。

利奈「まあ大丈夫だと信じよう……」

あの時の祥平は洒落にならない程に自分を追い詰めてたもんね。今回はそれがない事を祈るしかないね。

「理事長室前」

「ここか……良し！ 気持ちを切り替えて！俺は扉にノックをする。

「どちら様ですか？」

祥平「今日お試しでここに通う高田です。」

??? 「入つて良いわよ」

祥平「失礼します……お久し振りですね遥さん……」

ショートヘアでスーツ着ている女性は俺の母親の友達である橘遥さん。

遥「本当に久し振りね！元気にしてた？」

祥平「元気にしてはいましたがこんな形で会うとは思つてないですかからね？」

遥「ま！気にならない！さおりはまだ出張とか？」

祥平「母さんは父さんと一緒なので間違つてはないですね」

取り敢えず母さんはこの事に関しては説教だかんな！畜生！

遥「一先ずは祥平君が入るクラスはここだから」

えーと……2年B組か

遥「後は頑張れ！」

え？適當だな！おい！……担任の先生が後ろに立つてたよ

祥平「えつと」

先生「それではついてきて」

うへえ……めっちゃ苦手なタイプの人だわ……てかもうクラスについたが……俺は廊下で待つ。大体転校生つてこうだもんな

先生「えー、今日は転校生の紹介をします。入つて
氣を取り直して……元気に行こう！」

祥平「初めまして高田祥平です！皆さんと仲良く出来れば嬉しいなと思つてますので
よろしくお願ひします！」

祥平「あれ？ 凄い静かだけど…………、めっちゃ、きやああああつて言う普通？女子が
そんな感じなんだな

先生「はい静かにして！ それじやあ高田君の席は……冰川さんの隣だね」
…………え？

紗夜「な……」

嘘だろ…………でもチャンスか

祥平「よ、よろしく」

紗夜「……」トイ

ぐ！ やっぱり朝の事があつたから…………いやどうしよう！

（そして昼休みの屋上）

祥平「やっぱり屋上が助かるわ」

クラスで食べるとかまじで無理……紗夜とどうやって仲直りすれば良いんだよ

千聖 「あれ？ しよう君こんな所で何してるの？」

祥平 「…………いたの？」

千聖 「今、来たところよ？ 暫くは仕事休みで学校に来る事になつたの」

祥平 「怪我の事はすまない、いてつ！」

千聖のデコピンを喰らつた俺はおでこを抑える。

千聖 「それはもうおしまい。それより紗夜さんの事でしょ？」

祥平 「え？ 何でそれを！」

千聖 「日菜ちゃんから連絡あつたのよ。どうにかして仲直りをさせたいって」

日菜ちゃん…………ありがとう

祥平 「良し！ 一先ず飯を食つてエネルギーチャージヤだ！」

千聖 「それ昔には良く言つてたわよね」

祥平 「でもこうすれば前向きに行ける気がするんだよな！」

そう言つたしょう君は少し涙を流していた。仲直りしたいのもだけど凄く後悔して

たんでしょうね……

祥平 「ごちそうさまでした……でも無理に出たら結局無視されるもんなー」

千聖 「そこはしょう君の努力次第でしょ？」

祥平 「なんだよな……千聖ありがとな」

千聖「いきなりどうしたのよ？」

祥平「いや、ただ、そう言いたくなつたんだよ……行つて来るか！」

千聖「頑張りなさいよ」

祥平「おう！」

俺は走つて紗夜のいる場所に向かう。

祥平「ジーットしてもどうにもならねえからな！」

紗夜に否定されても俺は何度でも謝る！例えどんな事があつてもだ！

紗夜「……」

私はお昼を1人で食べていたのですが……何故か土下座をしてきていたのは彼であつた。

祥平「本当にごめん！俺がした事は取り返しのつかない事なのは充分に分かつてゐ！」

紗夜「もう1度言いますが話しをかけないで下さい。貴方の顔を見たくもないのが分かりませんか？」

やつぱりそう言つてくるよな……

祥平「紗夜が言いたい事も分かる。でも！「今すぐに目の前から消えて下さい」紗夜

……」

紗夜「だからもう呼ばないでと言いましたよね？」

祥平「うん言つてるね」

紗夜「それなら早く目の前から消えて下さい。」

駄目だ、多分聞く耳ないな、一度下がるか

祥平「分かった……でも諦めないからな！」

彼は戻つて行く……何で一度見捨てた癖にまた仲良くなんて……出来ません！

（2年B組）

祥平「はあ……」

どうしたら紗夜と仲直り出来るか、考えないとな……でも……やっぱり無理なのか
な？

そう悩んでいた祥平だがそのまま今日が終わつてしまつた。

祥平「……」

駄目だ！全然仲良く出来る方法が思い付かない！……

祥平「紗夜……」

紗夜「……」

もう話しをかけるなつて言つてたけどそこまで避けられるとは……やっぱりあれだ
よな。クラスの人達はもう帰つていたが紗夜も準備をして俺を無視する。

祥平「今は最後にしどくよ、あの時はまじでごめん……」

彼はそう言つて立ち上がりつた瞬間いきなり咳をし始めた。白々しいわね……

祥平「あーまたこれか」

え? 手には血! 何で?

紗夜「その血は何なの!」

紗夜が怒りながら俺に聞くが……やばいこれだけはばれちゃ駄目だ……

祥平「気にするな、そんな大事じやないから」

昼飯食つてる時に口の中を間違えて噛んじやつたからそれで血が出ました、何てふざけて言えないよ?

紗夜「気にしますわよ! そんな平氣そうな顔をしながら! だからあの時も……そう言えば中学1年の冬で確か同じく咳をしたら手に血が…………!、何を隠してるの!」

……流石にあの時と同じ所を見られたんだ、そう簡単には逃げられないか…………いや! 嘘でも突破しなきやいけないからな……ならば!

祥平「いやあ! 実はこれさケチヤップ何だよ! 紗夜を脅かすのに使つたんだよ! ははははは!」

ふつふつふつ……これならいいける!

紗夜「……なら舐めても構いませんよね?」

……は？ いやいや！ 待ってくれ！

祥平「舐めるの駄目だからな！ ほら俺の手にバイ菌あるかも知れないんだぞ？ それを舐めるのなんて駄目！」

紗夜「目の前で咳をしているのに……そんなので嘘をついてまで逃げられると思いませんか？ 私を見捨てた裏切り者さん！」

裏切り者さん……俺が紗夜にした事で付けられたあだ名になってしまった……仲直りは逆に難しいな

祥平「紗夜……」

千聖「待ちなさい！」

いきなり教室に入つて来たのは……千聖だつた

紗夜「白鷺さん何しに！」

千聖「彼！ しよう君が！ 紗夜ちゃんに裏切り者さんつて言われなきやいけないの！」

紗夜「事実には変わりません！ 昔の彼は私と日菜を見捨てたような人ですよ！」

確かにあの時の俺は2人を見捨てる形になつた。……どうする事も出来ない苦しみ

での2人を近くにいさせちゃいけないと思つたからそうした。

千聖「しよう君の気持ちも知らずに良く言えるわね！」

祥平「千聖！ 言うな！」

俺は千聖が言おうとしてるのが嫌な予感したから止めに入るのだが

千聖「今は完全に治ってるから良いけど！昔のしよう君は癌があつたんだからね！誰にも相談しないで！1人になつて！」

千聖：それ言うなつて前にも言つたのに……

紗夜「え？ 癌？ 昔に……何を言つてるの？」

紗夜の顔は真つ青になつていた。

祥平「はあ……千聖？ 言うなつていつたよね？」

千聖「ごめんなさい、でも……」

祥平「帰ろう……紗夜また明日……」

気まずい空氣で俺は千聖を引っ張つて行き帰る。

紗夜「癌？ 昔に？……」

私はそんなの知らなかつた、彼が癌なんて……どうして教えてくれなかつたの……

（帰り道）

千聖「しよう君……怒つてる？」

祥平「んー、ちよつとな？」

千聖「ごめんなさい！ でも何もしらないでしよう君を傷付ける理由にはならないからね？」

祥平「そうだけさ……俺もいつか紗夜に言わないといけないとは思つてたから丁度良い機会かもな。千聖ありがとな」

しよう君はそう言いながら私の頭を優しく撫でて来た。

千聖「……明日は紗夜ちゃんに聞かれたらどうするの？」

正直言うとあんまり嫌なんだがいつまでも逃げる訳にもいかない。

祥平「その時にはその時に答えるつもりだよ」

千聖「頑張つてね、それでしよう君はいつまで頭を撫でるつもりかしら？」

祥平「す！すまない！嫌なら止める！」

あ……つて私は何を思つてるの！……でも……もうちよつと撫でて欲しかつたかな

祥平「そう言えば足は大丈夫？まだ歩くの辛いなら俺がおんぶする？」

千聖「恥ずかしくないかしら？」

祥平「そんな事はないが？」

しよう君つてたまの不意打ちで天然あるわよね。

祥平「千聖の家もうついたぞ？」

千聖「え？……何か反対方向だなあーって思つてたら」

祥平「暫くは送つていくよ。その足だと帰るの大変だろ？」

千聖「ありがとね、でも明日からは送り迎えがあるから大丈夫よ」

祥平「分かった、それじゃ！また明日な！」

「よう君は走りながら手を振つて帰る……」

千聖「紗夜ちゃんと仲良く出来れば良いけど……」

「祥平 side」

祥平「はあ……」

俺は自分の家に帰つてる途中であるんだがちょっと公園で考えていた。勿論……紗夜の事だ。俺が癌になつてしまい、それで関わる人達に酷い態度をとつて嫌われる方法をしていたんだが紗夜は俺の事を心配していくんだがそれを完全に無視して紗夜に酷い言葉を言つてしまつて。『そんな事されてもお前は気持ち悪いもう関わるな、妹と比べられて残念な姉さんだな』…………まじで俺つて糞だな……紗夜と仲直り何て絶対に難しいだろ。

祥平「まじであの時の俺は糞すぎるだろ……」

暗い事を考へても仕方ないか……ちょっと久し振りに鍛えるか……

祥平「ふう……はっ！やっ！せい！どおおおりやああああ！」

パンチ！蹴り！そして裏拳をする！

祥平「はっ！ふっ！せつ！やつ！」

パンチ！蹴り！パンチ！足を上に上げつ！

祥平「うわ！、いてて……まさか滑るとは思わなかつたな……」

やつぱりいつもより集中出来ない……やつぱり都合が良すぎるよな。

祥平「すつきりしないな……」

日菜「何してのお兄ちゃん？」

俺は地面で横になりながらそう思つていたら俺の様子を見る奴がいた。氷川日菜
ちやんだつた。

祥平「日菜ちやんこそどうした？」

日菜「んーとね、暇だつたから散歩してた！」

祥平「相変わらず元気でなによりだな」

日菜「それでお兄ちやん聞いて欲しいんだけどさ」

祥平「どうした？」

日菜「何で昔お姉ちやんや皆から離れていつたの？」

祥平「言わなきや駄目か？」

日菜「うん……」

はあ……日菜ちやんにはちゃんと説明しなきやいけないのが嫌なんだが……しやあ
ないか……

祥平「中学1年の冬を覚えてる？」

日菜「うん、あの時にお兄ちゃんはお姉ちゃんや皆から嫌われる用にしてたのは良く覚えてるよ。でも中学1年の春に千聖ちゃんに何度も声をかけられてたよね?見てたんだけど?」

祥平「良く覚えてるね……日菜ちゃんにも言わないと駄目だな。」

日菜「何を?」

俺は日菜ちゃんに昔:癌だった事を話したんだがいきなり押し倒して來た。

日菜「何で!何で!それをお姉ちゃんにちゃんと言わなかつたの!凄く心配してたんだよ!今日帰つて来てから凄く酷い顔をしてたのを見て何があつたのか聞こうとしたら泣いたんだよ!」

祥平「それは……」

日菜ちゃんは紗夜の事を心配して怒つてるんだよな……まじでごめんな

日菜「お兄ちゃんはどうしたかつたの!」

祥平「……俺はあの時は生きるのを諦めたんだ。」

日菜「生きるのを諦めた?」

祥平「怖かつたんだ」

あの時は死ぬのも怖かつたが同時に怖いと思ったことがある。

日菜「怖かつたのは何となく分かるよ!どうしてあそこまでやるの!自分を傷付ける

のは間違つてるよ！」

祥平「日菜ちゃん俺はそう言う人間だ！その時の俺はもう誰とも関わるのが全て嫌になつた！だからそうやつて心配されるのが余計に嫌だつたんだよ……」

お兄ちゃんは辛そうな声で喋るのを止めなかつた。

祥平「皆に癌だつて知られてみろよ？それで皆の態度が変わるのが怖かつたから1人になつたんだよ！だから嫌われ者になつた！」

日菜「そ、う、な、ん、だ、…」

祥平「それで紗夜にも…酷い事を言つた！そんな俺にはもう仲直り何て出来ねえよ！こんな酷いことをした俺となんて！」

お兄ちゃんは回りの皆がそれで変わる事の恐怖から逃げて1人になる為にわざと嫌われ者になるなんておかしいよ。それにお姉ちゃんからもお兄ちゃんに私とお姉ちゃんを比べて更には心配してたお姉ちゃんに気持ち悪いから構うなつて聞いた時は納得出来なかつたけど……

日菜「お兄ちゃんはやつぱり優しい人だよ……」

祥平「日菜ちゃん：俺は優しくない。最低な人間だ。」

日菜「誰だつて怖くなつたら逃げるのは当たり前だよ？それにお姉ちゃんに言つた事は本心じやないでしょ？」

祥平「本し「本音で答えて！」本心じやありません！」

そして日菜ちゃんは俺に指を指してこう言う。

日菜「明日！お姉ちゃんと仲直りしてね！」

祥平「…………は！んなの無理だろ！」

日菜「最初から諦めるな！やつてみなきやわからない事もあるんだよ！お姉ちゃんはあれで怒つてると思つたら違うからね！家ではお兄ちゃんの事を凄く心配してたんだよ！」

祥平「でも！」

日菜「でもじゃない！そんなの私はるんつてしない！お兄ちゃんはお姉ちゃんと仲良くしてるのがるんつてするの！」

…………ありがとな日菜ちゃん

祥平「そこまで言うなら俺は紗夜と仲直りをして見せるよ！例え時間がかかつても何とか仲直りしてみる！」

日菜「絶対だからね！」

日菜ちゃんは強く抱き締めて言うが…………これあまりよろしくないよ？柔らかい物が当たつてるんだが…………

日菜「今、変な事を考えてた？」

祥平「ゾンナコトナイヨ?」

日菜「うわ!凄い棒読み!」

でもそんなお兄ちやんだからお姉ちやんとは仲直りして欲しいと思つたんだよね。

♪祥平&日菜 side end♪

♪紗夜 side♪

紗夜「……」

千聖さんの言葉が離れなかつた。彼が癌だつた事を知つて私は頭の中が真っ白になり帰つて布団の上に横になつて考へてしまひますね……ですが朝には酷い言い方したのに今更……でも彼がした事は何となく分かつた。あの時の私と日菜を比べられ心配してたのも気持ち悪いと言われて傷付いたけど癌だつた彼は絶対に1人になる選択をすると今では分かります。でもそれは癌を利用していじめる人がいたのかもしれない、だから彼はわざと嫌われ者になつた……私の方が最低じやない。彼はいじめの標的が自分になると思つたけど違う……彼の癌を心配する私と日菜を守つてくれた?でもそこまで考えるのかしら……?

紗夜「少し外にでも出ましよう……」

私は気分を変えて散歩に出る事にした。

♪外♪

ちよつと私は思つてしまふ事があつた。

紗夜「それにしても日菜は何処に行つてゐるのかしら?」

流石に変な事に巻き込まれてはないわよね?

紗夜「ん?公園から声?」

私はそのまま公園の方に入り声がある方へ向かう。

祥平「ソソナコトナイヨ?」

日菜「うわ!凄い棒読み!」

この声つて日菜と……彼?何で日菜と話してゐるの……だけど何を話してゐるのか確認

ね

日菜「お兄ちゃんが私達と縁を切つてからお姉ちゃん大変だつたんだよ!」

え?日菜何を言つてるの?

祥平「え?それつて何があつたんだ?」

待つて!聞かないで!日菜!お願ひだから言わないで!

日菜「んーとね、内緒に言われたけど今は笑い話しへなるかも」

日菜ああああ!

祥平「逆にそれ聞いて大丈夫なのか?」

そうよ!聞かない方が良いわよ!

日菜「えー、お姉ちゃんが此処にいるわけないじゃん？」
いるわよ？ここにいるわよ！

祥平「確かにいるわけないか？なら聞こうかな…」

ちよつと！待ちなさい！何で止めないの！もうこうなつたら！

♪ 紗夜 side end ♪

♪ 祥平 & amp ; 日菜 side ♪

祥平「てかそのお兄ちゃんってのはまだ呼ぶのか？」

日菜「うん！」

いつも元気だがあの時はまじで大変だつた。小さい時に日菜ちゃんは紗夜にプレゼント
しようとして迷子になつたのを必死に探して何とか見付けたけどめつちや泣いて
たがその時からお兄ちゃんつて呼ぶようになつてたなあ……

祥平「んじや！そろそろかえ「日～菜あ～！」！、さ！紗夜！」

日菜「お！お姉ちゃん！」

俺達は話していてまさか紗夜が現れるとは思わなかつた……

END

第5話 普通が良いな⑤

俺達は話しに夢中だったから紗夜がいるなんて気付かなかつたぞ……てか

祥平「怒つてる？」

紗夜「怒るに決まつてますよ！日菜は帰つたら覚悟しなさい！」

日菜「もしかしてさつきの会話は何処から聞いてたの？」

紗夜「ソンナコトナイヨつて所からわよ！」

祥平「だにい！」

俺の棒読みやん！恥ずかしいわ！ちくしょう……ちつくしょ———う！

日菜「お兄ちゃんどうする？」

祥平「どうするも何も……」

怒つた紗夜は俺にもどうする事も出来ない……

紗夜「……それで何で日菜といったの？」

祥平「日菜ちゃんが暇で散歩してたら俺を見掛けてこつちに来て、それで話してた

……紗夜本当にごめん！俺にはこうやつて謝ることしか出来ない！」

今更なにを言つても……

日菜「お姉ちゃんの本心はどうなの？お兄ちゃんと仲直りしたくないの？」

紗夜「当たり前よ？心配してたのを気持ち悪いと言われ否定していた人を今更「お兄ちゃんがどうしてそう言つたのか知つた方が良いよ」聞く気はないわよ」

やつぱり駄目か……俺がした事とはいってここまで否定されるとは紗夜の心に傷付けちゃつたんだな

日菜「お兄ちゃんが今までして1人ぼっちになつて嫌われ者になつた理由を！」

紗夜「1人ぼっちになつて嫌われ者になつた理由？そんなの知りたくもないわよ」

私は分かつていたのにいつもの癖で……

日菜「そうなんだ……お姉ちゃんの今の言葉だつて本心じゃないの分かるよ？」

え？それってどういうことだ？

紗夜「日菜？」

日菜「お姉ちゃんはまだ嘘をつくの？お姉ちゃんが本当はわかってるよね？お兄ちゃんと仲直りを一番したいのってお姉ちゃんでしょ？前に部屋で言つてたの何回も聞こえてたからね？」

日菜ちゃんの真顔で怒った言い方が凄く怖い……

紗夜「そんなこと！「そんなことじやないでしょ！」……」

日菜「お姉ちゃん！本当のこと教えてよ！」

紗夜「本当のことなんて……」

日菜「それならもうお兄ちゃんと会うの止めたたら？お姉ちゃんがそのままお兄ちゃんを否定するって言うなら！」

え？こっちを見るなよ、チラチラつと見んじゃねえよ……はあ、たくよおー

祥平「日菜ちゃん……後は俺から言わせてくれないか？」

日菜「分かった……私からはもう何もないからお兄ちゃんに任せると……」
いや、俺も日菜が真顔で怒るの怖いの初めてしつたからな？」

祥平「…………さてとそれで紗夜……大丈夫か？」

紗夜「何よ？」

日菜ちゃんの真顔での怒りで紗夜は少し震てるが……

祥平「日菜ちゃんが言つた通り……ちゃんと答えて欲しい……」

彼は真剣な顔をしている……確かに私は心の何処かではまたあの時みたいに戻れたらと考えてはいました……ですが

紗夜「貴方があの時にいつた言葉は確かに嘘かもしれない……ですがそんな直ぐに仲直りは無理ですよ……」

何となくはわかつていたが……

紗夜「ですが……また戻りたいとは少しだけ思いました……」

紗夜……

祥平「それだけで充分だよ、ありがとう」

紗夜「……日菜帰るわよ」

日菜「はーい、お兄ちゃん！またね！」

祥平「おう！またな！」

日菜ちゃんと紗夜は帰つて行くのを見届ける……

祥平「……そこで何してるの……姉さん」

利奈「千聖ちゃんから聞いたんだよね……血を吐いてたって」

まじか、千聖よ姉さんにだけは勘弁してくれよ

利奈「無茶はしないように」

姉さんは俺の頭を撫でてそう言う…………まあ、実は間違えて口の中を噛んじやつたから血が出ちまつたなんて今更言えないんだよなあ。そして俺と姉さんは家に帰つたんだが……

（高田家）

祥平「ふいーただし「兄さーーーん！」ウエーーーイ！」

利奈「え！何！何があつた！」

いきなり吹き飛ばされた祥平の上に何かいたと思つたら！

利奈「ユリ！ 何でここにいるの！」

ユリ「そんな事より兄さんの匂いを嗅ぐのが最優先だから！ いや待て！ 何でそうなるの！」

利奈「先ず離れなさい……」

ユリ「嫌だ！」

利奈「離れなさい！」

ユリ「いーやーだーーー！」

利奈「だーめーーー！」

いつまで俺の上で話してんじゃねーよ、てか姉さんも姉さんで無理矢理にでもユリを引き離してよ。

祥平「ユリどいてくれ」

ユリ「嫌だ！」

祥平「どいて？」

ユリ「嫌だ！」

俺はユリの顔面を掴みアイアンクローラの準備する。

祥平「なあ……ドコウカ？」

ユリ「ごめんなさい！ それだけは許して！ 兄さん！」

祥平「何だ？ 最後の言葉か？」

ユリ「愛してる！」

祥平「感動的だな……我が妹よ……だがな？……無意味だ！」

ユリ「い——や——！」

俺は妹のユリにアイアンクローラーをしてユリのことをどかしてリビングに行く。当然妹は平気な顔をして入つて来る。

リビング

祥平「んでいきなりどうしてこつちに来た？ 母さん達と一緒にだつたよな？」

ユリ「兄さんが女子の学園にいるつて聞いて帰つて來たの、それで私もそこに入ることにしたの」

真顔で言うなよ……

利奈「そんで母さん達は？」

ユリ「え？ 連絡なかつた？ 母さんが兄さんに確か電話を何度もしてたよ？」

祥平「え？ 何度も電話？……あ！ あれ母さんだつたのか！」

ん？ 電話？……なんだ母さんか……いや待て母さんかよ！

祥平「母さん！ 一体何してんの！……え？ 電話したのに俺は出なかつた？……」

あ！ 確かに電話あつてしまつこいから電源切つたがあれつて母さんだつたのか

……やべえ完全にやつちまつた。

祥平「うん……へーい……」

俺は大人しく電話を切りユリの方を見る。

ユリ「どうしたの？」

祥平「まあ…母さんが頑張れだとよ」

ユリ「はーい！」

こうして俺の妹、高田ユリが明日から俺と同じ高校に通うことをすると母さんからも言われた。……ユリは紗夜とは仲が悪いんだよな、俺のことになると……

（次の日の昼休みの屋上）

千聖「それで仲直りは出来たの？」

いきなりその話題か、まあ、隠す用な事じやないからな

祥平「少しだけど仲直りは出来ると思つてる。」

なら良いんだけど……そう言えば

千聖「昨日の血とかは大丈夫なの？」

祥平「あー、午前中に病院には行つたけど何も異常はなかつたよ、単なるストレスによるものらしい」

千聖「ストレス？しよう君つて何でそう言う事を相談しないの？」

祥平「俺も無意識にストレス溜まつてたのしらんかったんだもん」

千聖「それなら無理しないようには？」

祥平「おう……それで千聖」

千聖「どうしたの？」

……あかん、やつぱり無理だ！

祥平「いや、やつぱり何でも「そんな訳ないでしょ？」……いやでも」

千聖「しよう君はそうやつて無理するでしょ？それに今のしよう君は疲れてる顔をしてるわよ？」

祥平「いやでも「だーめ！言いなさい！」……」

流石に恥ずかしいだろ？膝枕してくれつて言えないからね？

千聖「ちよつと頭をかして！」

祥平「え！ちよつ！」

俺は強制的に千聖に膝枕をされた。

祥平「い！いや！待て！待つて下さい！誰かに見られたらどうすんの！」

千聖「しよう君はほつといたら絶対に自分の中にしまいこむでしょ？」

祥平「いやでも」

千聖「でもじゃないでしょ？しよう君は本当に無理しないで」

私はしよう君の頭を優しく撫でてそう言う……

祥平「……やつぱり千聖には敵わないや……ちよつとこのまま寝ても良いかな？」

千聖「良いわよ。ちゃんと起こして上げるから」

祥平「そうか……なら……お休み……」

寝たわね……しよう君は最近疲れてたしたまには甘やかさないトネ♪

祥平「……」

やべえ……背中がゾワツとしてきやがつた……氣のせいだよな?…………まあ、いい

や寝よう。

（放課後）

祥平「午後の授業出ないで寝てしまつた。」

千聖「本当にごめんなさい。起こしたんだけど全く起きなくて驚いたわよ。」

祥平「いや、まじでごめん、俺も今日はまさかそこまで寝てしまうとは思わなかつた

……千聖は立てる？数時間もそのままにしちまつたからさ」

千聖「……ダイジヨウブヨ？」

めつちやかたことになつてんだが……ちよつと試しに

祥平「本当か？正座だつたんだぞ？ちよい」

俺は足を軽くツンとしてみた。

千聖「ひやつ！」

……これは大人しく止めよう

千聖「…………ちよつと来なさい」

やべ、終わつた……

千聖「えい！」

祥平「ちよつ！いきなりこっちに抱き付くなよ！うわ！」

バランスを崩して倒れてしまつた。千聖の仕返しがたまに洒落にならないんだが

……

千聖「しよう君……」

顔が近い！しかもさ……胸が当たつて色々不味いんだけど……俺が上を向いたらそんな顔をするなよ。

祥平「千聖さん？近いからちよつと「嫌よ」…………どうしたの？俺も千聖にはいつも助けて貰つてたし何か相談乗るけど？」

千聖「…………ちよつとこのまま抱き付いてて良い？」

祥平「でもちよつと体勢を変えて良いかな？横になつてるのあれだから」

千聖「そうよね、分かつたわ。」

一度起き上がり座つた状態に直したんだがすぐに抱き付くつて……本気でどうした

?

祥平「千聖なにか悩みあるのか？」

やばい心臓がバツクバツクだぞ？

千聖「ちよつとストレスが溜まっちゃったからしよう君に抱き付いてたら落ち着くのよ」

祥平「そつか……気の済むまで良いよ

……もうどうにでもなりやがれ。

千聖「ありがとね……」

ストレスとかなら仕方ないのかな？でも……千聖がストレスって何にそんな風になつたんだ？

祥平「世の中分かんねえな」ボソ

千聖「……」

ストレスって言うのは確かにあるわよ？でもこうやつてればしよう君の体温を感じてられるから良いのよ。…………でもね、1つだけストレスがあるかと言われると……しよう君つて何でなのかしらね？

何で他の女達とハナスノ?
END

第6話 普通が良いな⑥

放課後は特にやる事なく帰ったけど先生に午後の授業を出なかつた事で叱られた。

それが終わつたから今は家に帰つてゐる。千聖は用事があるらしいので帰つた。

祥平「……」

帰つたら今日は何をするか？ん…………メールだ、日菜ちゃんか？えーと何々？

お兄ちゃん！今暇だよね！暇でしょ！ちょっと家に来て！面白い物あるから！絶対に来るよう！利奈ちゃんには話しといたから！

祥平「姉さんには話したつて一体何をするんだよ、たく、行くか……」

俺は水川家に向かうんだがこの後の数時間大変な目にあうとは俺はこの時には思つてなかつた。

「冰川家前」

祥平「…………よくよく考えたら紗夜とはまだ微妙な感じなのに日菜ちゃんに呼ばれるのも何か嫌な予感するな……」

俺はインターホンを押そうとしたが日菜ちゃんが出てきた。

祥平「何で分かつた？」

日菜「お兄ちゃんが来るのは大体は分かつてたからね！」

自信満々に言うな、それより話しを聞くか。

祥平「んで何で呼んだ？」

日菜「お兄ちゃん明日学校お休みでしょ？お姉ちゃんから聞いたから今日は泊まつて

貰うね！」

おーと用事を思い出したなあ／あ——————！

／日菜の部屋／

祥平「それで何がしたいんだ？」

日菜「今からお姉ちゃんの部屋に行つて貰いま——す！」

……は？

祥平「いやいやいやいや！紗夜に殺される！それだけは無理だろ！」

日菜「お姉ちゃんには了解を貰つたから大丈夫だよ！」

いや絶対に了解してないパターンだろ！親とかいないのか！

日菜「お母さん達なら今日は帰つて来ないつて連絡あつてお兄ちゃんのことを話した

らOK貰えた！」

うつそだろおい……

祥平「おい！引つ張るなよ！日菜ちゃん！ちよつ！」

（紗夜の部屋）

待て待て待て待て待て！日菜ちゃんに引っ張られて連れて来られてしまつたん
だけど！

祥平「取り敢えず出なくちゃ……あれ？開かないんだが？」

…………、「おい！開いてくれ！何で開かないんだよ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！」

祥平「いや言つてる場合じやねえよ！何で開かないんだよ……ん？玄関が開く音？」

紗夜が帰つて來たのか？」

…………まずい！流石にこれはあかん！何とかして！

祥平「上がつて來てる……どうす……」

やばい終わつた……この後俺はどうなるの……

紗夜「な、何をしているのかしら？」

怒つてるよな？こ……これはヤベーイ！

（祥平 side end）

（紗夜 side）

日菜からメールで聞いたけどある人が泊まりに來るのね……私はどんな顔をすれ
ばいいのかしら……

紗夜「そう言えばちよつと準備があるから少し遅れて帰つて來てと言つていたけど？」

…………少しうらつとしてから帰りましょう。」

そう、この時の私は知らなかつたまさか彼とあんな事になるとは思つていなかつた。

「数十分後の氷川家前」

紗夜「さてと少しどころではなく思い切り散歩してしまつたわね」

私は自分の部屋に鞄を置きに行つたのけれど……

紗夜「な、何をしているのかしら?」

部屋のドアを開けたら彼が何故かいた……

「紗夜 side end」

祥平「えつと……紗夜さん鞄を投げようとしないでくれませんか!」

紗夜「それなら何故いるのですか?」

笑つてない! 笑顔だけど笑つてないからあかん! ……でも紗夜とはこのまま普段通り話せたら良いんだけどな……

紗夜「それより貴方は身体の方は本当に大丈夫なの?」

祥平「ん? 何が?」

紗夜「あの時の放課後に口から血を出していたでしょ?」

そう言えばいつてなかつたか? まあ、隠すことじやないけどな

祥平「病院での診断はストレスって言われたからストレスを溜めない用にはするつも

りだ。」

紗夜「ストレスならいいのですが……それより私の部屋に何故いるのか教えて下さい？」

心配してくれたのは嬉しいんだが普通にそうだよねえ」
祥平「実は日菜ちゃんに案内されました……」

紗夜「後でちゃんと説教でもしないと駄目ね……」

……あれ？これは気まずいなんてレベルじゃねえ……

祥平「あー……はしつこにいるよ、流石に迷惑だし」

と俺がはしつこに移動しようとしたら裾を掴まれていた。

祥平「えーと紗夜さん？何でしょうか？」

私は少しずつでも……彼と

紗夜「迷惑なんて思つてないですよ……」

祥平「いやでも「でもじやありません！」えー……」

紗夜「えー……じやない！」

2人『……』

祥平「ぷつ……」

紗夜「ふふ……」

2人は何処か楽しそうな顔をしていた。少しだけ仲が戻つてゐるのかもしないわね
.....祥平も紗夜ちゃんとちゃんと仲直りしなさいよ.....

E
N
D

第7話 仮面ライダークイズ勝負！ コラボ編①

？？？

祥平「手紙を読んでここに来たけど何が始まるんだ？」

暗い中で何とか歩いてるんだけど次の瞬間いきなり明るくなつた！

利奈「皆さん集まりましたね！ それではここに来ている人達に入場して頂きます！ ま
ずは！ あんどうーサンシャインさんの所からの主人公！ 栄結愛さん！ どうぞ！」

結愛「栄結愛！ 参上！ 今日はよろしくお願ひします！」

やばい殺氣を感じるが同時に……観客のうおおおお！ つて凄いな、何か千聖っぽい人
が結愛さんの方を見ながら泣いてるし……俺なにをした？

利奈「そして！ 我らの主人公で私の弟！ 高田祥平！」

祥平「高田祥平が来た！ こちらこそ今日はよろしくお願ひします！」
と言つたその時にいきなりナイフ数本飛んで來た。

祥平「ナイフ飛ばすとか馬鹿だよな？」

俺はそのまま全部のナイフを指に挟んで止める。

祥平「……」のナイフを投げた奴は……おつと……」

俺は後ろからの攻撃を避けるがその人物に結愛さんが驚いてた。

結愛「千聖！あんた！何してるの！止めなさい！」

成る程な、こつちのじやなくてコラボ先の千聖か……

千聖「結愛…そうはいかないの、結愛の近くにはいさせない！私の結愛なのにな？」

……こいつは俺でも少しめんどくさいぞ？

結愛「いや！さつさと帰れ！今日は平和に楽しみたいんだから！」

うわあ～マジで嫌になるよな……あんな風に人つて変わるのか？

千聖「ほら帰るわよ！」

結愛「嫌だ！」

千聖「帰る！」

結愛「い・や・だ！」

凄い大変そうだな……ん？睨まれた？

千聖「……ならそこのゴミ虫！」

千聖が祥平さんの方へ指を差しながらゴミ虫と呼んだ。

祥平「ん？ゴミ虫？俺が？はつーはつはつはつ……誰がゴミ虫だ？」

利奈「……」

その呼び方は完全にアウトだよ。千聖ちゃん無事な事を祈るね。

祥平「んーとそつちらの千聖さんや俺はあんまり女性にキレる事はなかつたんだがそのゴミ虫つて呼んだ事を謝るなら今だぞ？」

ごめん、千聖ちゃん無事にはすまないかもしれない…………ほら構えて壁目掛けてやろうとしてるよ……」

千聖「へえ？ もし謝らなかつ…………え？」

後ろの壁を見たら穴が空いていた…………え…………え？ どうやつた？」

祥平「物なんて使つてないぞ？ ただのパンチだぞ？」

ただのパンチであんな離れてる壁に穴を開けられるの普通？ いや普通じやないよね

！

祥平「因みにあれ人のにも出来るぞ？ それでもう一度聞くぞ？ 謝るなら今だぞ？」

結愛「…………」

私は思つた…………この人は怒らせたら本当にやばい人だよ。だつてさ、更にさ…レンガを片手で破壊するとかもう人間じやないでしょ……あれ……

祥平「…………」

千聖「ゴ……ゴめんなさい…………」

千聖が素直に謝つた……だと……

祥平「姉さん！ 始めてくれ！」

全く無理矢理なやり方だけど謝らせるとは相変わらずだなあ～流石は私の弟！

利奈「それでは第1回コラボ！仮面ライダークイズ大会を始めます！」

結愛「クイズ大会？」

利奈「ルール説明はあるから安心してね！」

第1回コラボ 仮面ライダークイズ大会ルール説明

- ・クイズに正解したら1ポイント貰えます。（ボーナスクイズでは3ポイント貰えます。）

- ・互いにホワイトボードに答えを書く。（書かなかつたらポイントマイナス1します。）

・相手に手を出してはいけない。（手を出したらポイントマイナス2します。）

- 利奈「今の所はこの3つを守つて貰います！因みにポイントが多い方には豪華な景品が出ます！」

それって大丈夫なのか？

祥平「姉さん？これ問題は何個あるの？」

利奈「全部で15問！」

マジで言つてんのか……ん？結愛さん？

結愛「負けないからね！」

そう拳を前に突き出していたので俺もそれにあわせて拳を軽くコツンとやる。

祥平「おう！」

こうして俺と結愛さんとのクイズ勝負が始まろうとした。

END

第8話 仮面ライダークイズ勝負！ コラボ編②

～ステージ～

利奈「それでは最初なので簡単な物から！第1問！」

・契約モンスターがいない仮面ライダー龍騎がソードベントを使いました。そしてミラーモンスターに突っ込んで行きました。果たしてどうなったでしょうか？

祥平「これか……あれだよなあ～」

結愛「これは簡単だねえ～」

2人はホワイトボードに字を書いている。

利奈「さあ！書けたら回答をどうぞ！」

祥平の回答

あ！折れたあーーー！

結愛の回答

あ！折れたあーーー！

利奈「2人とも正解！」

祥平：1ポイント

結愛：1ポイント

祥平「よし！」

結愛「でも外したら恥ずかしい所だつたなあ！」

利奈「それでは第2問！」

・仮面ライダー・デイケイドの色はピンク色？それとも違う色？

利奈「さあ！これはどうかな！」

祥平「おい！途中ここ的小説タイトルになつてるぞ！」

結愛「凄いタイトルだなあ！」

2人はそう言いながらホワイトボードに答えを書く。

利奈「それでは回答をどうぞ！」

祥平の回答

マゼンタ

結愛の回答

マゼンタ

利奈「2人とも正解！それじゃあ！どんどん行くよー！第3問！」

・仮面ライダー・カブトの2号ライダーは誰？

結愛「これは決まつてるかな？」

祥平「……これもしかして？」

多分だがこれあつちだよな、本来そだつたけど何か出てこなかつたもんな……

利奈「さあ！書けたかな！回答をオープン！」

結愛の回答

仮面ライダーガタック

祥平の回答

仮面ライダーザビー

利奈「祥平が正解！」

結愛「え！嘘お！」

これはマジで良く考えないと間違える。確かにガタックなんだけど本来はザビーが元々2号ライダーだつたがいつの間にかザビーの変身者いなくなつたもんない

祥平のポイント3

結愛のポイント2

利奈「今は祥平が1つリード！果たして結愛ちゃんは勝てるのか！」

結愛「絶対勝つ！」

流石に姉さんの意地悪だなあ～俺も流石に卑怯だと思うが……仮面ライダークロスが分からぬ人は後で読んで見て下さい！

利奈「第4問！」

・仮面ライダージオウでオーマジオウに膝をつかせたのはジオウ〇〇〇〇〇〇
当てはまる物は何でしょうか？ ↓〇が

祥平「これは分かる！」

結愛 —あれしかない！—

2人は素早く答えを書いていた！

和奈 一そりでは回答をどうぞ!!

祥平の回答

トリニティ

紅愛の回答

ג'ז

利奈「両者正解！まだまだ行くよー！第5問！」

洋平「あひぎーーーーーーーー

結愛
「しゃ――！」

2人は徐々にヒートアップしていた。これ大丈夫なのか?

利奈「回答をどうぞ！」

祥平の回答

仮面ライダーG

結愛の回答

仮面ライダーG

利奈「両者また正解！ではボーナスクイズ発動！これに答えられたら3^oポイント貰えます！第6問！」

・仮面ライダー電王のイマジン、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス同時に入ったフォームは何でしよう？

祥平「これは……待つてあれ？どうだつたけ？」

結愛「貰つた！」

利奈「それでは回答をどうぞ！」

祥平の回答

ライナーフォーム

結愛の回答

クライマツクスフォーム

利奈「結愛ちゃん正解！祥平との差が出来たあ——！」

祥平「ウソダンドンドコドーン！」 5

両手と膝をついて祥平はショックを受けていた。それは仕方ない、頑張れ！

結愛「よし！」7

利奈「まだまだ終わらないよおー！第7問！」

・仮面ライダーエグゼイドでめっちゃキャラ崩壊したのは誰でしょう？

祥平「これは貰つたぞ！」

結愛「まあ～あれは流石に凄かつたもんねえ～」

利奈「回答をオープン！」

祥平の回答

・檀黎斗

結愛の回答

・檀黎斗

利奈「両者正解！第8問！」

・仮面ライダー鎧武が巨大なインベスに予想外な防御をしました。さあ、何でしょう

？
祥平「これ……覚えてる人いるのか？」

結愛「確かに……」

2人はゆっくり書いている。確かにこれはちょっと特殊だねえ～

利奈「では回答オーブン！」

祥平の回答

- ・オレンジスカツシユをしてオレンジを頭に戻して回転させて防ぐ。
結愛の回答

・オレンジスカツシユをしてオレンジを頭に戻して回転させて防ぐ。
利奈「2人とも正解！」

祥平のポイント 7

結愛のポイント 9

利奈「さあ！……次回に続きます！」

END

第9話 仮面ライダークイズ勝負！ コラボ編③

利奈「さあ！ 今の2人のポイントは！」

祥平のポイント7

結愛のポイント9

祥平「2ポイントの差か……勝てんのか？」

俺はそう考えてたら結愛さんがこつちに声をかけてきた。

結愛「このまま絶対に負けないからね！」

祥平「おう！ こつちもだ！」

祥平……これで負けたらあんたは後が大変だから気を付けてねえ！

利奈「では第9問目！」

・仮面ライダーウィザードは一度魔法が使えなくなり変身も出来なくなりましたが晴斗の涙から産まれた指輪は何リングでしょう？

祥平「待って、俺、その時からウィザード見逃したから……わかんねえ！」

何だつけ！ 何かめっちゃ銀色のフォームだよな？……全然覚えてない！

結愛「やっぱりあのリングだよね？」

利奈「祥平はこれ覚えてるかなあ？そして結愛ちゃんはやっぱり分かるよね……」
待つてウイザードまじで見た記憶があまりないんだけど……

利奈「それでは2人とも回答オープン！」

祥平の回答

・無限リング？

結愛の回答

・インフィニティリング

利奈「結愛ちゃん！正解！」

インフィニティかー！その時には見逃したから忘れてるとかの問題じゃないだろ！

結愛「これは流石に負ける気がしない！」 10

祥平「本気でやべえ……」 7

利奈「それでは第10問目！」

・仮面ライダーディケイドには謎の映画P.V.があつた？なかつた？

結愛「これは流石に衝撃的過ぎるから忘れないよ」

祥平「あれはあれで見てみたかつたかもな……」

2人は流石にこれは分かるか……

利奈「回答オープン！」

祥平の回答

・あつた

結愛の回答

・あつた

利奈「2人とも正解！」

結愛「だよね、あの謎の最終回にあの映画のPVには驚いて良く覚えてる。」

祥平「俺も同じだよ」8

利奈「それじゃあ！第11問目！」

・仮面ライダークイズの最終回で使われた3つのコンボは何でしょか？

祥平「3つのコンボか……あれだな！」

結愛「あれも最終回は良かった！これは流石に分かる！」

2人はホワイトボードに書く、果たしてどうかな？

利奈「では回答オープン！」

祥平の回答

・タトバコンボ、プトテイラコンボ、タジヤドルコンボ

結愛の回答

・タトバコンボ、プトテイラコンボ、タジヤドルコンボ

利奈「正解！」

祥平「良し！でもボーナスポイントないとやっぱり逆転無理そうだな……でもやれるだけやるぞ！」 9

俺は拳を前に出してそう言う！

結愛「このままいけば優勝……頑張るぞ！」 12

お客様凄い声だな……俺も頑張らないとな！

利奈「第12問目！」

・仮面ライダーキバの本来の姿は？

結愛「誰もが予想外だつたもんね」

祥平「俺も後から知ったけどびっくりしたわ」

2人はさらっと書く。

利奈「さあ！回答オープン！」

祥平の回答

・エンペラーフォーム

結愛の回答

・エンペラーフォーム

利奈「正解！」

祥平のポイント10

結愛のポイント13

利奈「第13問目！」

・仮面ライダージオウの武器で登場が少なかつたのは何？

祥平「絶対にあれだろ、悲しいが……」

結愛「うん、あれだね……」

これは分かるよねえ！でも祥平、このままで大丈夫なの？

利奈「さあ！回答オーブン！」

祥平の回答

・ライドヘイセイバー

結愛の回答

・ライドヘイセイバー

利奈「2人とも正解！そのまま第14問目！」

・感情で発動する仮面ライダー名とフォーム名をフルで

祥平「遂にそんな書き方か……」

結愛「でも流石にわかるから、よし……」

これはどうなるかな？

利奈「さあ！これは正解するかな！回答オープン！」

祥平の回答

・仮面ライダーゴーストムゲン魂

結愛の回答

・仮面ライダーゴーストムゲン魂

利奈「2人とも正解！それでは最後の問題はボーナス問題になります！今の2人のポイントは！」

祥平のポイント12

結愛のポイント15

利奈「このボーナス問題に正解したら10ポイント貰えます！」

祥平「これは勝ちたいな……」

結愛「問題次第では勝てる！」

利奈「ではいきます！」

・オーマジオウを継承した力でジオウは変身しましたがそのフォーム名は何でしょう

か？

結愛「これは……」

祥平「前に映画を見たから分かる！これはあれだ！」

果たしてこの問題を2人は正解するのか？そしてどっちが優勝するのか！

利奈「それでは最後の回答オープン！」

祥平の回答

・仮面ライダージオウ オーマフォーム

結愛の回答

・仮面ライダージオウ オーマフォーム

利奈「2人とも正解！そして2人に10ポイント入ります！」

祥平のポイント22

結愛のポイント25

利奈「優勝は結愛ちゃんです！」

お客様の歓声が凄かつた、悔しいのもあつたけど……楽しかったよ。ありがとうございます。

…

結愛「えっと……優勝？」

利奈「はい！優勝です！それではまずは豪華な景品！」

C S M アークル2個を結愛さんに姉さんが渡していた。あれってやばくない？2個とか……

結愛「あ！ありがとうございます！」

利奈「それではこれにて第1回！コラボ仮面ライダークイズ勝負を終了します！皆さんはありがとうございました！」

「会場の外へ

祥平「いや、久し振りに楽しめたあ、結愛さん今回のクイズ勝負ありがとうございました。」

結愛「こちらこそありがとうございます！……1つ質問良いですか？」

祥平「別に構いませんけど？」

結愛「アルビノを見ても何でなにも言わないの？」

その質問は覚悟してたけど……めっちゃ結愛さんの後ろから殺氣がやばいだろ……でも俺の答えは決まってる。

祥平「確かに最初はちょっと戸惑いもあるにはあったけど……1番はやっぱり人の中身だとは思つてる。今の世の中、外見で差別とかする奴はいるかもしれないけど結愛さんの身近にはいるんじゃない？アルビノを気にしないって……その人達との時間を絶対に大切にして下さい……時間は永遠じゃないので……」

そう言えば、そうだったかも……」

結愛「時間は永遠じゃないか……少し千聖達との時間を大切にしなくちゃ駄目かもね

……」

そう考えてたらもう時間が過ぎていた。

結愛 「今日は本当にありがとうございました！また会えたら！」

祥平 「会いましょう！」

俺はフォーゼの友達の証を結愛さんとする。こうして今日の出来事は無事に終わつたのであつた……

END

第10話 普通が良いな⑦

（紗夜の部屋）

紗夜「……」

どうしましよう……私は……

祥平「おーい、紗夜さーん……」

どうやつて仲直りをすれば良いの？彼は私と仲直りをしたいといつていたけど今更

……

祥平「……」

めっちゃ悩んでるな……てか部屋から出たいしあの手で姉さんと日菜ちゃん絶対に
来るからな……良し！

BGM（フュージョンライズ）＊（ウルトラマンジード）と朝倉リクが変身する時に
掛け声で流れてるBGMです。）

祥平「融合！」

紗夜「え、何でいきなり!?」

その時にドアが開かれ姉さんが左手を上に上げる。

利奈「行くわよ！」

祥平「アイゴウ！」

日菜「るんつてきた！」

日菜ちゃんも左手を上に上げるのであつた。

祥平「ヒア！ウイーゴー！2人とも覚悟しろおおおお！」

2人『し、しまつたあ――――』

彼は日菜と利奈さんを追い掛けて部屋を出て行くのでしたが……大丈夫なのよね
？何か走つて来る音がしたと思つたら彼が戻つて来ていた。

祥平「紗夜、少し外へ散歩に行かないか？昔の事を少し話しがしたいんだけど日菜
ちゃんには話した事なんだが紗夜にも話そうと思つたんだ、もう逃げないって……」

日菜には話した事つて何なの？それだけ大事なことなのよね……少しだけ怖いわ

……

日菜「お姉ちゃん！」

紗夜「ひ、日菜！」

突然だつた紗夜の後ろから日菜ちゃんが出てきていた。待つて、どうやつて気付かれ
ずに紗夜の後ろに行つたの？

日菜「お兄ちゃんの話しさちゃんと聞いて欲しいの、私も話を聞いた時は驚いたけ

ど聞かなかつたら絶対に後悔する……」

紗夜「それはそうなんだけど、心の準備が出来て「お兄ちゃん！お姉ちゃんを連れて
いってね！」え！日菜！」

私は右手を彼に掴まれていた。

祥平「んじや日菜ちゃんの命令なら連れていくぜ！」

紗夜「ちよつと！そんな引っ張らなくとも！」

お兄ちゃん……」

利奈「日菜ちゃんどうしたの？」

日菜「お兄ちゃんとお姉ちゃんが2人きりで話すつて外に散歩しにいったよ……」

そうなのね……もう覚悟して話すんだね……」

利奈「日菜ちゃんもごめんね、まさかまたこんな事になるなんて」

日菜「神様も酷いよね、お兄ちゃんは助かつたと思つたら、こんな酷い運命どうすれ
ば良いの……」

日菜ちゃんは今にも泣きそうであつた。私も悲しかつた、辛かつた。でも1番辛いのは作り笑いをしている祥平よね……紗夜ちゃん、お願ひだから祥平を見捨てないで上げ
て……」

～公園付近～

祥平「はあ、面白かつたぜ！」

彼は笑いながら親指を立ててこちらに言うけど……

紗夜「走らなくても良かつたでしょ……はあ……はあ……それで話しどは？」

一旦、深呼吸をして落ち着かせて話しをする心の準備をする……

祥平「んじや話すとしますか……」

あの笑顔からいきなり真剣な顔をしていた……何か凄く不安で悲しい顔をしていま
すね、あの時と同じ顔を……まさか？

紗夜「ちよつと良いかしら？」

祥平「どうした？」

もしましたあの時と同じ事を言つてきたら、私は彼とは……

祥平「紗夜、先に謝つとくな、ごめん！」

紗夜「へ？」

私は彼に突然抱き締められていた、しかも真正面から……

紗夜「な、なななな、と、突然何をするのですか！／＼／＼

祥平「紗夜が震えていたから落ち着くまでこうする」

私……震えていたのね……でも何で貴方まで震えているの？

祥平「えつとな、このまま話すわ、この間さ病院に行つたんだよ」

あの時には千聖にストレスだと嘘をついたのは申し訳ないことを今、思つてる。

紗夜「そう言えば遅れて来ましたね？」

彼の手は何故か震えていた……

祥平「実は話すか最初は悩んだんだけどよ……俺さ……やべえ、言おうと決心したのになあー……」

私の顔に何か水滴が落ちて来て彼の顔を見てみたら涙を流していた……そして抱き締めていたのを止めて彼はベンチへ座るのでした。

祥平「紗夜……」

紗夜は俺の手を優しく掴んでいた。温かい……

紗夜「ゆっくり落ち着いてから話して下さい。」

彼は何かに震えていたのは何なのか、分からぬ、でも無理に聞くのも逆効果……なら落ち着いてから私は聞きたい……

祥平「…………ありがとな、少しは落ち着いた。」

紗夜「本当にですか？」

紗夜は笑顔で言うけど笑つてない！逆に怖い……

祥平「本当だよ、話すから覚悟はしてくれ、実は病院で言われた事なんだけど……

E
N
D

また癌が再発した……
』

第11話 普通が良いな⑧

紗夜「え、癌つて……嘘ですよね？」

俺は首を横に振つたんだが紗夜は両手で俺のほっぺを掴む。

紗夜「日菜や利奈さんには？」

祥平「話したよ。もうあの時みたいに1人になろうとはしない……」

震えている…………そうですよね、治つたと思った病気が再発して治るのかも分からない。誰だつて怖い、ただ祈るしかないといふ。

祥平「紗夜？」

紗夜「無事に癌が治りますように…………」

手を握つてそう言うけど簡単には治るなんて思えない。でも俺は死にたくない…………

そう思うしかない…………

祥平「くよくよしてもしようがない！こんなんで暗くなるなんて俺らしくないな！こう言う時は楽しいことするか！」

無理して元気に振る舞つてますがやはり震えていますね…………それなら私がやる事は1つだけですね。

祥平「ん？ 電話？ 誰からだ？ ちょっとごめん」

電話の相手は日菜か利奈さんのどちらか？ 「はあ―――――」え？ どうしたの！

紗夜「何がありました？」

祥平さんは電話を切り、私は聞きますがその答えにこの後、今まで驚いてしまいます。

祥平「病院の先生からなんだが」

紗夜「まさか、もう治らないと……」

祥平「間違えだつて言われたよ……」

紗夜「間違え？ それつてもしかして？」

祥平「変わらず健康体だつて言われた。」

そう教えたら一気に力が抜けて俺は地面に座る。

祥平「マジで心臓に悪い……こんな間違いとか流石にキレたい……でも……良かつた――――――！」

紗夜「本当に全くですよ……」

とまあ、健康体なのはあつてるけどマジでの医者め！

紗夜「思つたけどあの時の口から出てた赤い液体は何だつたんですか？」

ある意味こつちも怒られました。 テヘペロ！

祥平「本当のこと言うとあれ口の中を噛んだから痛めて血が出てました。待つて！ い

や、俺も悪かった！だからさ、その手で何をするつもりだ！待つて！いや待て！待つてつて言つてるだろおおおお！」

俺は紗夜に数分ぐらいイタズラをされてしまう。

「数分後」

祥平「はあ…はあ…マジであんなイタズラ止めてくれ…はあ…はあ…」

紗夜「文句は言わせないわよ…」

祥平「流石に戻ろうか、日菜ちゃんや姉さんにも病院から連絡があつたのを報告だな……」

姉さんは怒るけど日菜ちゃんはどうなんだろうか？

紗夜「ほら帰りましょう」

そう俺と紗夜は冰川家に戻つて姉さん達に教えたんだが

「冰川家」

祥平「いででで！姉さん！痛い！痛いつつうの！」

利奈「医者も悪いけどあんたもちゃんと疑いなさいよ！あの医者は信用出来ないんだから！」

姉さんのアイアンクローラを喰らうけど姉さんはマジで痛い！痛いから勘弁してくれ！

日菜 「もつとやつちやえーー！」

祥平 「待って！マジで離して！いだだだだ！」

アイアンクロードが痛くてマジで泣きそうだぜ！畜生！

紗夜 「利奈さん、流石にここまでにしませんか？そろそろ晩御飯にしませんか？」

利奈 「んー、それもそうだつたね」

姉さんのアイアンクロードからやつと解放された、姉さんのアイアンクロードマジで苦手だから嫌なんだよな……

そして飯を食い終えた俺達は風呂とかに入り後は寝るだけ何だが明日は学校休みなんだよな、てかよお！

「紗夜の部屋」

祥平 「何で紗夜の部屋に入るんだ！日菜ちゃん！おーい！…………」

俺は頭を抱えて突っ込むしかなかつた。まさか日菜ちゃんにここだよつて部屋に連れて来られたんだがまた閉じ込められた。

祥平 「よし俺は床で寝るから、おやす「そんなの駄目に決まつてるでしょ！」ええ～」

紗夜 「ええ～、じゃない！風邪を引かれても私が困るわよ。」

祥平 「いや：別に大丈夫だよ、俺はそんな簡単……えっと紗夜さん？」

紗夜さん、笑つてない！笑顔だけど笑つてないから、止めて！

紗夜「良いからここに来なさい」

祥平「だから！……分かつたから！その顔で睨まないで下さい！」

結局紗夜の布団で一緒に寝る事になつたが流石に距離を開けている。流石に理性を保たないとあかん……

紗夜「…………祥平、ちょっと良いかしら？」

祥平「どうした？」

紗夜「手を…握つて…貰つて…良いですか？」

祥平「別に構わないけどどうした？」

紗夜「昔はこんな風に寝てたのを思い出していたら握つて欲しいと……駄目でした？」

顔を真っ赤に恥ずかしそうにしていた紗夜に俺は何処か安心をしていた。

癌だつて言われて絶望したけど医者が間違えて別の人を見ていたつて言われた時は怒りもあつたけど……再発しなくて良かつた……

祥平「良いよ、ほれ」

俺は紗夜の手を掴み、そのまま寝ることにした。

紗夜「祥平の手はやっぱり温かくて安心するわ……」

祥平「何か小さい時を思い出すな、紗夜がお化けにビビつて寝れなくて俺の手を握つ

て寝たよな！」

紗夜「そんな恥ずかしい事は思い出さなくて良いから！／＼＼＼＼

本当に元の生活に戻れて良かったよ、本当に……」

紗夜「何で泣くの！どうしたの！」

え？俺が泣いてる？」

祥平「え？どうして？おかしいな、はははは、紗夜……？」 ポロポロ

紗夜は起き上がつて俺を起き上がらせて強く抱き締めていた。

紗夜「もう強がりなんていらない、祥平はここまで本当に頑張ったわよ、だから今は

泣いて構わない……」

紗夜に言われた祥平は今まで抑えていた気持ちの理性が外れて大泣きをする。

とても辛かつた、寂しかつた、怖かつた、死にたくなかつた、いっぱい俺を不安にさせていたが紗夜の言葉でもう素直に泣くことしか出来なかつた。

～数十分後～

祥平「すげえ！恥ずかしい、子供みたいに泣くとは思わんかった。」

紗夜「1人で辛くなつたらまた話しへ聞くわよ」

祥平「その時は頼むわ」

祥平の支えになるなら私は……」

祥平「寝るか?」

紗夜「そうね……」

回りの人なんて……

千聖の家♪

千聖「……」

明日しよう君に会えるかしら? ちょっと色々言いたい事があるけどもう我慢なんて出来ないわよね? 出会つてからずっと側にいたいのに紗夜ちゃんや日菜ちゃん、利奈さんや他の奴らをしよう君から離れて貰わないといけないわ。

もし更に女の子と話してたら私はもう実行するしかない……

千聖「無理矢理にでもヤルシカナイ……」

♪次の日♪

利奈「お邪魔しました、紗夜ちゃん……日菜ちゃん……これからも家の弟と仲良くして上げてね♪」

紗夜「当たり前ですよ、祥平が嘘をつこう何てしない筈ですよ♪」
紗夜の笑顔が怖い、いつもより怖いからね!

日菜「そのつもりだよ! お兄ちゃんとはずつと仲良くするつもりだよ!」

あん時みたいにはしないつもりだけど昨日の紗夜の表情は何か……怖かつたの気の

せいだよな？別に何もなかつたし……

祥平「また学校でな、日菜ちゃんもまた遊べた時にな」

日菜「うん！」

日菜ちゃんの笑顔はマジで癒されるな、たまに日菜ちゃんにも頼もう……

祥平「んじや姉さん行こう」

利奈「だね、じゃあね！」

何ででしようか、胸あたりがムカムカする……利奈さんや日菜と喋ってても大丈夫ですが何故か他の女達を創造したら制御が出来る気がしません……

（祥平と利奈の方）

祥平「ヴエックション！誰か噂でもしてんのかな？」

利奈「それで風邪引いたは無しね？」

祥平「分かってるよ……」

でも何か嫌な予感がするのは気のせいだよな？

END

第12話 普通が良いな⑨

紗夜の家で泊まつてから数日たつてから何か様子がおかしかつた。

「夜の公園の付近」

祥平「んー」

マジで昨日からなのか視線を感じる……

祥平「気の……せいだよな?……」

取り敢えず俺は歩き始めるんだが後を着けてる?……

祥平「誰だ!……」

後ろを振り返つても誰もいなかつた。何なんだよ、一体……
その日は帰つたがついてくる気配はなかつた。

「次の日の学校の屋上」

祥平「…………」

やべえ視線を感じてから全く寝れてないな……

千聖「どうしたの?」

祥平「ん? 千聖か、いやちょっとな」

てかまたスカートの中が見えそうであぶねえよ。

千聖「何か悩んでるの？」

＼千聖に説明中＼

千聖「誰かの視線を？それってストーカーじゃないの？」

祥平「俺も実際それなかつて疑つてはいるけど何も俺に何もしてきてないから困つてんだよな……」

千聖「そうなのね、それは大変ね」

＼……この胸騒ぎは何なんだ……＼

千聖「それより私のスカートの中を見た♪」

あ、ばれてるし怒つてるわ……：

祥平「見てないよ♪」

千聖「目が泳いでるわよ♪」

祥平「悪かったからその手でくすぐろうとするな！」

＼夕方の学校帰り＼

祥平「今日の晩飯のおかず買いに行けつてマジでなんのつもりだよ、もう……」

たくよー姉さんはいきなりなんだからよー……ん？またか？

祥平「！、誰だ！俺の後をつけているのは！」

マジで紗夜の家に泊まつた次の日から精神的におかしくなりそうだ……

??? 「やつぱりもう駄目かしらね……」

祥平「お前だつたか……千聖」

電柱の柱から出てきたのはやつぱり千聖だつた……

千聖「何で分かつたのかしら？」

祥平「千聖は何がしたいんだ？俺に何を求めてるんだ？……、いきなり何をすんだ！」
千聖に押され壁に寄せられていた。

千聖「他の女と一緒にいるのを見てていつも吐き気がしたわよ！何で今更になつて私以外の女といようとするの！貴方は癌だつた頃に誰にも頼ろうとしなかつたのに何で本当に今更！」

昔は確かにそうだつた。でも日菜ちゃんや紗夜そして千聖のお陰で今は1人になろうとは思つてない！

祥平「昔の頃とは違う！もう1人でいるのは寂しいんだよ！それを誰もより千聖が教えてくれただろ！」

それはそうね、でもね……もう我慢なんてしないわ！

祥平「おい！何するんだ？」

千聖の両手を掴み抵抗するが千聖の力強くない？

千聖「しよう君をこの手にするならどんな事もする。」

祥平「！、うおつと！」

ス、スタンガンだと！マジでやばいぞ、これ……

千聖「私から逃げる気？」

祥平「流石にスタンガンだけは勘弁だわ！……んじや！」

流石はしよう君……でもね、私はそんなんじゃ諦めないわよ！

＼夜＼

祥平「はあ…はあ…はあ…」

どうするか、今の千聖はいつもと違う……姉さんに相談してもこれは難しい……

千聖「何処にいるのかしらね？スタンガンは止めて上げるからね！」

スタンガン持ちながら言う言葉じやねえ、マジで千聖どうしちまつたんだよ……んだ
よ、邪魔をすんなよ……肩をポンポンするなつつうの……だあーー！

祥平「もう邪魔をするなつて！」

千聖「みくつくたゞ」

ぶつな！今のはガチでギリギリ過ぎるだろ！まさにギリギリチャンバラだな！はい
！アルトじやくないとおー！うわつと！

千聖「しよう君のギャグは後でね♪」

祥平「しつと心を読むんじゃねえよ！あぶね！」

スタンガン何とかしないと話しが出来ない……

千聖「じつとしてなさいよ……」

祥平「それは断るぞ！」

走つて逃げようとしたらが千聖の動きが速すぎるだろ！うお！

祥平「あぶね！」

マジでしつこい…………これつてヤンデレとかじやないよな？でもヤンデレとしか思
えない。

千聖「ふつふつふつ！」

祥平「その笑い方は気持ち悪いぞ、流石に……」

千聖「少し黙らせた方が良さそうね？」

参つたな…………どうすつか……ダツシユしたいけど追い付かれるしな……：

千聖「大人しくするのが懸命な判断よ？」

祥平「大人しくしたいけど千聖がスタンガン持つてる以上は無理な相談だな」

千聖「なら問答無用にやるわ！」

あー仕方ない！こう言うのにはあれだ！

祥平「スタンガンを捨てろ！じゃねえと大嫌いになるぞ！」

千聖「調教するから大丈夫よ？」

調教つて言つた！調教つて言いやがつた！怖いよ！

祥平「おい！んなの更に嫌だわ！」

千聖「へいき、へつちやよ！」

祥平「それは千聖が言う台詞じやない！」

マジで千聖が壊れたんじやないのか？

千聖「壊れてないから安心しなさい♪」

祥平「だから心を読むな！」

千聖「愛の力よ！」

いや、え？えー、それは流石にドン引きだわ。マジ引くわー……

千聖「そんな顔をしない！」

祥平「だから止めろ！もう今日は急いでるんだから邪魔すんな！」

千聖「内容次第では止めて上げる」

あー、まだまともか……

祥平「姉さんに買い物を頼まれて「はい駄目よ」うおい！」

千聖「他の女の所なんかに行かせないわよ！」

いや待つてまともじゃないよ！そしてスタンガンをしまつてマシンガン出して来や

がつたよー

千聖「あははははは！」

怖い！マジで怖いよ！笑顔だけど笑つてないから本気で怖い！

千聖「逃がさないわよ？」

祥平 「止めて！本気で怖いから！」

これから祥平は千聖との鬼ごっこがはじ「始まらねえからな！」いや、始まります。
祥平「なんのごめんだあ————！」

千聖「逃がさないわよ？」

の心を合わせてシノービー！

千聖 「忍者じゃないわよ……それより逃げないで大人しくしなさい♪」

ごめん、みんなこれにてこの作品は今日で最終回みたいだ。あの世でまた会おうぜ！

千聖「いや終わらないからね？と言うかメタいわよ！」

祥平「だからしつと心を読むんじやないよ！あれれえ？おかしいぞ？」

聖がいつの間にか俺の首を掴んで引っ張られる。待つてくんない？逃げられないぞ？

千聖「逃がさない用に力を入れてるから諦めてね?」

祥平「離せ！離すんだ！」

千聖「答えは聞いてない！」

祥平「答えを聞けよおおおおおおお！」

こうして俺は千聖から逃げる生活が始まってしまう。

祥平「俺……無事に逃げられるのか？」

E
N
D

第13話 普通が良いな⑩

（高田家）

利奈「遅い……遅すぎる……」

何か無ければ良いけど……まあ最終的に遅かつたら連絡するから良いかな？

（その頃の祥平）

祥平「しつけ——！」

俺はあれから1時間も走つて千聖から逃げてるんだけどマジで体力が化物レベルだろ！

祥平「くっそ！」

まつさか…きつたぞ、来たぞ！アラレちゃん！なんてないよな？

千聖「あるわよ？」

祥平「いや！いやいやいやいや！何で直ぐに追い付いた！」

どうやつて来た!?マジで速いぞ！

千聖「愛があれば何でも出来るのよ！」

祥平「そんな愛は認めねえ！」

と俺はこれを毎日ずっと鬼ごっこ状態なのだ。俺いつそんなフラグ立てた？

千聖「フラグは立てて無いわよ？」

祥平「また心を読むな！うお！」

掴まつたら絶対に嫌な予感しかしねえ！てかスタンガンをまた持つてるのかよ！

千聖「ほら安心しなさい、祥平は私と一緒にいるのが決定事項よ？」

祥平「だから嫌だつて言つてるだろ！」

千聖「問答無用よ！」

はあ～、師匠にはもしやばかつたら使えつて言つてた方法で対抗するしかなさそうだな……これ今の千聖にやつて後で殺されるのは覚悟しどこう……

祥平「千聖、お前が悪いんだからな！」

千聖「何を言つて！」

と俺は千聖に足払いをし地面に押し倒そうとした！

祥平「やべ、ミスった！」

千聖の腕を抑え着けるつもりだつたんだが間違えて胸を触つてしまつた……

千聖「えつと、しよう君？」

祥平「す、すすすすすまん！わざとじゃないんだ！」

土下座をしたけど少し顔を上げてみたら千聖の顔はみんなに見せられない顔をして

いた、めっちゃ興奮していた。

千聖「謝らなくて良いのよ、だから今のもう一度！」

祥平「やらん！絶対にやらないからな！」

やつぱり手強いわね、でも諦めないわ！」

千聖「今日はこの辺にしどくけどまた明日から追い掛けるからね♪」
そう言いながら千聖は静に帰って行つた。

祥平「こ、怖かつた……何なのマジで？あの千聖があんなストーカー見たいな事をするとは思わなかつた……」

これを誰に相談するか、でもそれで大変な目に会つたら大変だもんな……「あれ？高田先輩なにしてるんですか？」ん？この声つて……

祥平「あれ？沙綾か、どした？」

沙綾「いやこつちの台詞ですよ？」

この子は後輩の山吹沙綾。千聖や紗夜には絶対に内緒でお互いの悩み事や相談をしている仲だけど楽しい話しもしている。

祥平「あー……ちょっと色々なのははは……」

駄目だ、こんなの相談して危ない目にあつたら大変だ……

沙綾「色々つて絶対に危ない事ですよね？」

祥平「そ、そんな訳ないぜ！」

あー、やつぱり何かあるよ、先輩って分かりやすいよねー？

祥平「んじや俺は買い物があるから行くわ、気を付けてな！」

沙綾「相変わらずだね、さてと私も帰りますか？。」

でもこの時の私は先輩があんな目にあうなんて知らなかつた。

（祥平の買い物帰り）

祥平「本当に最悪な日だつたな…」

千聖がまさかあんな事を思つてたとは思わなかつた、ちゃんと話し合えれば良いんだ

が…

祥平「ん？電話だ、えーと誰からだ？」

俺はスマホを取り出し電話を出る。

祥平「もしもし？」

出たらいきなり怒鳴られた。姉さんが怒る理由は分かるが早く帰らないとな…

祥平「うん…うん、分かつた。んじや…さてとこれからどうすつか？」

千聖に追われてるから帰りは注意しながら帰ろう。

千聖「と思つたかしら？」

祥平「へあつ！」

マジかよ、いつの間にまた来てたのかよ！くそ！

千聖「どこへ行くのかしら？」

急いで帰ろう！もう流石に相手にしたくなえ！

祥平「何でいるんだよ！明日って言つてたじやねえか！」

千聖「答えは聞いてないわ！」

祥平「いや聞けよ！くつそ！」

隠れようとしても見られたら終わりだしどうすれば！

???「こっちです！」

いきなり手を掴まれた俺はそのまま引っ張られた。

千聖「あれ？ いなくなつちやつたわ？……今日はここまでにしといて上げるわ。次は絶対に掴まえて上げるからね♪」

千聖はそう言いながら本当に帰つていった。

祥平「さつきはありがとな、紗夜。」

紗夜「何か困つていたのを見ていたので別に良いですよ。」

いやマジで助かつたあ……ん――？

祥平「えっと紗夜さん、これはどういうつもりですか～？」

何故か紗夜は俺を壁まで追い詰められていた？

紗夜「そうですね……貴方が欲しいのでこうします」

あ……紗夜も違うけど千聖と似たのを感じたわ、なら逃げたいけど逃げられない！

紗夜「逃がしませんよ？」

祥平「首の後ろに両手を回すな、顔が近い！」

色々とやばい！早く逃げなければ嫌な予感しかしない！

紗夜「そう言いながら顔が赤いわよ？」

祥平「紗夜！マジで離してくれ！」

紗夜「嫌よ？」

うつそだろ……なら仕方ないがすまん！

紗夜「きやつ！」

俺は脇腹をツンと軽くやり何とか離れる。

祥平「紗夜悪いけど説教ならまた今度な！じや！」

俺はもう全速力で逃げる。あんなの耐えられる訳がないからな！

END

第14話 普通が良いな⑪

祥平「ただい 「おっそーい！」ぎいやああああ！」

俺は家に帰ったと思つたら姉さんにアイアンクローラーを数分も喰らうのであつた……」
数分後

祥平「いてー」

姉さんのアイアンクローラーはめっちゃ痛いから困るな

利奈「それで何で遅くなつたの？それと買つた物は？」

俺は買い物した物を姉さんに渡して自分の部屋に戻る

＼祥平の部屋前

祥平「ふう…しつかし千聖と紗夜には参つたな」

取り敢えず今日はもう休もう

祥平「さてと寝よ……」

と部屋のドアを開けたんだが部屋に千聖がいたんだけど氣のせいだよな？

祥平「まさかそんな訳……」

ドアをもう一度だけ開けたんだがやつぱりいたよ、めっちゃニコニコしながら待つて

るんだが……

「リビング」

利奈「え？ 千聖ちゃんが部屋にいる？ あー、忘れてたわ、今日は泊まりに来たんだつて明日の仕事はお休みにしたって言つて許可をしたんだけど？」

祥平「…………」

えー、まさかのそんな強引な手段を使って来るのかよ…………え？ 今日の夜は寝たら終わる……

利奈「因みに紗夜ちゃんと日菜ちゃんも来るだつて」

祥平「待つてくれ、いきなり過ぎて理解が追い付かないんだが？」

俺は頭の整理をしようとしたんだが姉さんの次の言葉で更に最悪だつた。

利奈「因みに私は明日から1週間の間は修学旅行だから3人と仲良くね？」

え？ 修学旅行？ うつそでしょ…………1週間もか……いや、ここで姉さんに迷惑をかける訳にもいかない……

祥平「うん、それなら俺が今日は晩飯作るから姉さんは準備をしててくれ、俺が美味しいの作るから！」

利奈「祥平が帰つて来るの遅かつたから最後の確認も終わつてるから忘れ物は特にないわよ」

ですよねー！

利奈 「でも祥平の手料理は久し振りに食べたいからお願ひするね♪」

祥平 「おう！」

なら6人分を作ろうとすれば作れるが何にするか……

利奈 「あら、誰かな？はいはーい！」

さーて何にすつかな……

千聖 「放置なんて酷いじやない？」

祥平 「ひやあああああ！」

み、耳元で突然囁かれて俺はビビった！

祥平 「い、いきなりは止めてくれ！」

くつそ！マジで危ない、しかも何でいきなり来るんだよ！

千聖 「そう言う反応を見たかったのよ♪」

笑顔で言うんじやねえよ！

祥平 「でも今から飯を作るから今のは止めてくれよ？」

千聖 「私でも料理中はさつき見たいなのはしないから安心してよ♪」

それがどうも信じられねえんだが……うつし晩飯は決まつたな

祥平 「今日はあれでも作るか」

そうして俺は作り始める

利奈「祥平♪、紗夜ちゃん達も来たよ♪！」

祥平「分かった！」

んで俺が作つたのはカレーだ。何でカレーなのか？少し前に姉さんがカレー食べた
いなうつて言つてたから思い出したから作つた

そして紗夜と日菜ちゃんが来てみんなで晩飯を食べ終え俺は食器を洗い自分の部屋
に戻る

♪祥平の部屋♪

祥平「ふう♪「しよう♪君♪♪」だから抱き付こうとするの止めてな？」

俺は片手で千聖が抱き付かない用に抑えてたんだが

紗夜「白鷺さん彼が困っていますよ？」

紗夜は左腕を掴んで離そうとしないんだが？

祥平「それを言うなら紗夜さんや何で隣にいるの？」

千聖は右で紗夜が左で俺を挟んで隣に座つてから何か怖いよ

日菜「お兄ちゃんなら何とかなるね♪」

祥平「いやならないからね？」

日菜ちゃんは正面から座つてからもう身動き出来ないんだけど、どうしよう……

色々危ないんだけど

千聖「日菜ちゃんその場所はするくないかしら?」

日菜「私の特等席だもんね!」

そんなニコニコされると止めろつて言えないじやねえか……

祥平「……」

手足が動けねえ……もうこのまま寝よう……

千聖「寝ても安心しててちゃんと面倒は見てるからね♪」

祥平「いや千聖からは嫌な気配を感じるわ」

千聖「チツ!」

いや待つて小さな声で舌打ちしやがったよ、女の子怖い!

紗夜「それなら私が「いや紗夜も止めてね」私は何もしませんから!」

祥平「冗談だよ」

こうした何ともない会話をしても1日が終わるのだつた……と思つてたんだが……夜に大変な出来事が起きたのだった

END

第15話 普通が良いな⑫

（祥平の部屋）

祥平「やつと1人になれたが……」

俺は1人になつた所でゲームをしようとしたんだが

日菜「お兄ちゃん、それ面白いの？」

祥平「あれ？ 何でまだいるの、日菜ちゃん？」

俺は1人してくれつて言つたのにどうしているんだ？

日菜「んー……面白そうだから♪」

うん。 そうだよね、日菜ちゃんは面白いと思う事には突つ込む事をするの紗夜から聞いたがまさか、今日されるとは思わなかつた……

祥平「ん？」

電話が鳴つてるが誰だ……凄い珍しい奴からの連絡だな……

祥平「どうした紗綾？」

マジでいきなりの連絡だな。 でもどうしたんだ？

紗綾『先輩、遅くに申し訳ありません』

祥平「いや別に構わないけど何かあつたか?」
紗綾『いやあ、先輩あれから無事なのかの確認をしたくて電話しましたけど迷惑でしたか?』

祥平「あー大丈夫。色々あつたけど深刻な事では無かつたからな……」

あー、こうやつて心配してくれる後輩がいてくれるのはすげえ嬉しい。千聖や紗夜が昨日、今日でやつぱり変わりすぎて疲れてたから助かった……

紗綾『それで明日とか何か用事とかありませんか?』

祥平「いや特にないが何かあるのか?」

紗綾『先輩がオススメしてくれたゲームでちよつとどうしても進められなくて私一人じや分からなくて』

祥平「別に構わないぞ?」

紗綾『それじや明日お願ひします! ではお休みなさい!』

元気があつて素直な子でマジで良い子すぎるだろ…………ん? 日菜ちゃん?

日菜「お姉ちゃん達には内緒にしどくね♪」

祥平「ありがとな」

俺は日菜ちゃんの頭を優しく撫でたんだが日菜ちゃんは立ち上がるのだつた
日菜「それじや私はお姉ちゃん達の所に行くね!」

そう言つて部屋を出していく日菜ちゃんだつた。俺はと言つとゲームを再開させるの
だつた

「別の部屋」

千聖「退いてくれない?」

紗夜「嫌に決まつてるわよ?」

あれえ? お姉ちゃんと千聖ちゃんが威嚇しあつてる?

利奈「日菜ちゃん2人ともどうしちやつたの?」

日菜「何でかな?」

何か2人の間にバチバチするのが見えるんだよね。2人つて仲が悪かつたつけ?

利奈「一先ず、落ち着いて、ね?」

2人『無理です!』

うわ、息ピッタリだよ。それでこの2人は威嚇しあつてるの? ん? 日菜?
日菜「多分だけどお兄ちゃんのことだと思うよ?」

利奈「あー納得だわ。祥平のことになると2人共 暴走してそうだもんね。」

さてと私は自分の部屋に戻つて最後の確認でもしようかな

利奈「後は頑張つてね♪」

日菜「うん頑張る♪」

利奈はそう言いながら部屋を出ていき日菜はこの2人の喧嘩状態をずっと眺めていたが

祥平「日菜ちゃん、ちょっと」

日菜「ん？」

お兄ちゃんが小さな声で私を呼んだのに気が付いて部屋をこつそり出る。

祥平「千聖達は何があつたんだ、あれ？」

歩きながらさつきの千聖と紗夜の事を聞くがこれが嫌な回答を聞いてしまった

日菜「多分お兄ちゃんの事だと思うよ？」

祥平「マジかよ。でも何で俺のことであんな喧嘩状態になるんだ？」

お兄ちゃんってたまに女心を分かつてないんだよね。だから私でもたまに苦戦しちゃうんだよね

日菜「それより何で私だけ呼び出したの？お姉ちゃんが千聖ちゃんとどつちか呼べば良かったのに？」

祥平「いや、えつとな2人に言うとまた追い掛けられそうになるから日菜ちゃんにしか頼めないんだが良いか？」

日菜「私にしか頼めないこと？それって何？」

一先ずお兄ちゃんの部屋に入ろうとドアを開いて部屋を見たけど特に何もないけど

?

日菜「お兄ちゃんそれで頼みつて？」

祥平「隣に座つてくれるだけで良いんだが駄目か？」

お兄ちゃんが照れながらそう言うんだけど何か その姿を見ると凄いるんつて
る♪

日菜「それぐらいなら良いよ！でも何で座るの？」

祥平「千聖と紗夜の2人とはこうやつて話をしてたが日菜ちゃんとはあまり無かつ
たからさ、ほら相談ばかりだつたから普通に話しはしてないなつて思つたんだ」

日菜「…………確かにそうかも？お兄ちゃんと楽しく話しなんてもしかしてしてない
？」

癌の事や昔の事では話しきしたが楽しい会話なんてした覚えがそんなに無い……

日菜「でもね、私は別に無理して話そとしなくても良いと思うよ？」

私はさりげなくお兄ちゃん乗るのは止めてくれないかな？」

祥平「いや日菜ちゃん乗るのは止めてくれないかな？」

膝に頭を乗せるならまだ良いけどまさかそのまま全身で乗つて来るのは思わなかつ
たがちよつと色々とまずい！

日菜「え？嫌だ♪」

祥平「えっとだから……／＼＼＼

お兄ちゃんもしかして顔が赤くなつてるよね?……これはチャンスだよね♪

日菜「もしかして照れてる♪」

祥平「照れてない!／＼＼＼

日菜「そう言つて顔が赤いよお♪」

ほつペをぷにぷにしながら日菜ちゃんは俺をからかつて少し楽しんでる。いや楽しむんじやないよ

祥平「ほらしい加減にして降りろ」

日菜「んー……嫌だー♪」

私はお兄ちゃんを押し倒し抱き締めて逃がさない用にした

祥平「待つて日菜ちゃん! そんな強く抱き締めないで!／＼＼＼

これは不味い、色々と本当にヤバい! 日菜ちゃんは妹的な存在だからそこまで意識してなかつたけど流石にこれ以上は駄目!

祥平「日菜ちゃん離してくれないか?」

日菜「無理……」

祥平「んな即答しないでくれ。1回だけ離してくれないか?」

日菜「嫌だ……」

あれ？日菜ちゃんどうしたんだ？

日菜「私さ、何も考えてないと思うでしょ？」

マジメな声でいきなりそんな事を言つて来た。マジでどうしたんだ？

祥平「そんな事はないよ。紗夜と仲直り出来たのつて日菜ちゃんのお陰だと思つてる。じゃないと今こうして楽しく遊べてないと思う……」

日菜「そう思つてくれてありがとう。でもね 私もう自分の気持ちを抑えるの限界だつたからこうしてるんだよ？」

自分の気持ちを抑える？それつて何のことだ？まさか2人みたいに追い掛けられるのか！？

日菜「お兄ちゃんが思つてる用な事じやないからね？」

祥平「だから何で心を読めるの？ま、それは置いとくとして何か悩みがあるのか？」

お兄ちゃんは私の頭を撫でながら心配してくれた。だから私はあの時から……

日菜「お兄ちゃんの事が好きなの。兄妹みたいな好きとかじやなくて異性として私は好き……しよう君の返事を聞かせて……」

祥平「え？……いや……は？……え？／＼／＼

待つて日菜ちゃんが俺を好き？仲良し兄妹の好きとかじやなくて異性としての好き？LOVE？……

祥平「日菜ちゃん冗談とかではなく?」

日菜「本気だよ。今すぐに返事が欲しいけどゆつくり考えて良いよ? お兄ちゃん混乱してるでしょ?」

祥平「いやでも……」

日菜ちゃんは抱き締めるのを止めて立ち上がる

日菜「私はね2人より先にお兄ちゃんを……しよう君を好きになつてたんだよ?」

祥平「え? は? え? いつからだ?」

日菜「迷子になつた私を見付けてくれたあの日からお兄ちゃんで私の大好きな人にな
の……だからお姉ちゃんや千聖ちゃん2人に負けるつもりないから!」

あの時から、え? 嘘だろ? んな馬鹿な事はないだろ……あ――――――! もう頭がパン
クしそうだ……

祥平「ちよつと1人で散歩してくる!」

1度 状況整理をしなくちゃ駄目だ……はあ? どうすれば良いんだよ……

♪夜の外♪

祥平「あー頭がいてえよ、畜生……」

まさか日菜ちゃんに告白されるとは思わなかつた……マジでどうしよう……俺が昔
から好きなのは○○なんだが日菜ちゃんを傷付けたくないけど告白の事は本当に申し

訳なきけど。

祥平「断るしかないんだよな。でも日菜ちゃんを傷付けたくないし「しよううう君♪」あー千聖か、何だ、まだ俺を狙つてるのか？」

千聖「そうだけど何からしないけどどうしたの？何か悩みがあるなら聞くけど？」

祥平「え？押さえ付けて何かされると思つてたんだけど……」

何でいきなり優しくなるんだよ。さっきまでのヤバい千聖はどうしたんだ？」

千聖「失礼ね！しよう君が悩んでる時にそんな事をする訳ないでしょ？」

祥平「千聖…………ありがとう。」

（祥平 説明中）

千聖「日菜ちゃんから告白されたけど別に好きな人がいてそれで断るけど日菜ちゃんを傷付けるのが嫌だからどうしたら良いか悩んでたと？」

そう言いながらスタンガンを出すのを止めてくれ！

千聖「あのね、恋愛ってそういう物よ？告白して振られる覚悟だってあるし付き合えるかもしれない。だから傷付けない方法なんてないわ……それで告白の返事を長く待たせるのはよろしくないからね？」

祥平「だよな……」

そうだ。普通はなんだよ。俺は何を無茶な事を考えていたんだ……

祥平「千聖サンキューな……それとお前に大事な話しがあるから待つてくれ。」

まだ家から近いから直ぐに戻つてだ……行こう！

自宅玄関へ

日菜「戻つて来たつてことは……」

祥平「答えを持つてきた。日菜ちゃん……めんなさい。俺は君とは付き合えません。他に好きな人がいるんだ、だからごめんなさい……」

だよね。何となくそう思つてたんだけど…………私じや駄目だつたんだ……

日菜「お兄ちゃん、ちょっとコンビニでアイスを買ってきて欲しいなー♪」

祥平「今からか？「うんどうしても！」分かつた…」

お兄ちゃんは走つてその場から離れて行き。見えなくなつたのを確認した私はその場で座り込んだ。

日菜「やつぱりお兄ちゃんからしたら私は妹みたいな感じだよね……何でなのかな、涙が止まらないよ……」

紗夜「日菜どうしたの!?」

あれ、お姉ちゃんがいつの間にいたんだ。

日菜「あのね、お兄ちゃんに告白したんだけど……振られちゃつた……」

私は静かに日菜を優しく抱き締めて頭を撫で始める。

紗夜 「日菜……」

日菜 「何で私じゃ駄目だつたのかな? どうして私を選んでくれなかつたのかな? どうして……どうしてなの!」 ポロポロ

紗夜 「今は思いきり泣きなさい……」

日菜 「ああああ……!」 ポロポロ

この事に関して怒りたいと言いたいけど祥平も辛い気持ちなのよね。日菜を傷付けた自分が許せなくて泣いてただけど……

祥平 「日菜ちゃん、ごめん。でも日菜ちゃんの行動で俺も覚悟は出来た……」
千聖の方へ戻つて途中で俺はそう思いながら向かう……

「近くの公園」

千聖 「やつと来たわね。それで話しつて何かしら?」

祥平 「えつとよ千聖……」

いざ言うとなるとかなり緊張しちまうが……男ならちゃんとシャキッとした生きや駄
目だ!

祥平 「実は俺、千聖の事が……」

? ? ?
 |

そこで俺は目を覚ました。どのくらい寝てた？それにここは……病院？
俺は隣を振り向きそこには俺の大切な人がいた。

千聖 「起きるのが遅いわよ、しよう君♪……」 ポロポロ
祥平 「あーおはよう。そして傍にありがとな……」
「

E
N
D